岷江入楚

寫本

寄生

私年立にハ廿二三巻ニ中将之薫ハ廿一歳の春より
廿二巻の春まてとあり

廿三歳　年立にハ廿二歳ト云々　私云ハ早蕨ハかうし代具ニ識之

藤壺女御御服女二宮之御事

夏母女御卒去後之女二宮御裳着延引之事

四十九日過後女二宮参内之事

秋末内裏女二宮藤壺にて詠菊事

与源中納言打碁給事

夕霧左大臣六君御事　右大臣とあるか八誤なりとし

按察使大納言紅梅御方事

此時按察大納言ハ右大臣也後按察大納言といへれハ此かたら
兵部ハ式部中宮と云遊ふへきよしかてりよの宮とある
也給への後し

廿四歳　中納言　年立廿三歳ト云々

私云ハ廿二歳ト云流物廿四歳とし早蕨の同時なり

夏女二宮御除服賜事

帝以女二宮欲令嫁於源中納言給事
源中納言不忘故宇治之姫君事
夕霧之六君可嫁兵部卿宮事　可為八月事
宇治中君自五月比懐孕之事
八月源中納言折槿花参二条院奉見中宮事
此次色々物給之事
十六日兵部卿宮嫁娶之事　左大臣六条院東御方云々
二条院中君独詠歌事
明日兵部卿宮奉文於六条院事
兵部卿宮与二条院中君御物語之事
六条院御返事持参事
継母落葉宮代六君給事
兵部卿宮参於六条院給事　三日夜餅之事
源中納言宿按察使君局給　源中納言乞六条院給事
兵部卿宮給見六君給事　廿二三ト云々
兵部卿宮乞於二条院給事稀之事

中君遣文於源中納言事　可乞宇治給事
又日源中納言参二条院給事
隔几帳對面之事
押入母屋中不及實事同日奉文事
兵部卿宮渡二条院給
怪中君移香給事
源中納言送衣裳於二条院事
源中納言又参二条院事
入簾中寝居傍庭給事
中君語於手習事於源中納言為故姫君形代事
九月廿余日中納言出宇治事
召出弁尼對面事
召阿闍梨給御忌日経佛事
壊宇治故宮可為寺事
源中納言其秋留宇治与弁尼贈物給事
源中納言問形代事於弁尼々々委語申事

右京亮子也母ハ中将君と云後為陸奥守之妻又為常陸守云々
女房廿七八斗云々

於宇治折紅葉献二条院事
兵部卿宮見之中君ゟ文返事
菊盛兵部卿宮与中君物語事
夕霧大臣參二条院給事

廿五帖　正月任權大納言兼左大将　年廿三ハ廿四五トモ云々
自正月廿日中君悩給事
直物日源中納言任權大納言兼右大将事
參二条院匂宮御車
於六条院賭弓大将饗事
二月二条院中君誕生男子事　兵部卿宮渡御
御産養事　碁手銭事
廿日餘藤壺女二宮御裳着事
又日大将参給事
御門賜御文於大将母儀入道事

宮之若君五十日事
大将參二条院給見宮之若君事
三月晦日御門渡御藤壺事　藤花宴事　御贈物事
御遊事　大将賜天盃事　立文臺講師和歌事
詞云梅壺大納言とれいのかみさひてんしうとゝと
此梅壺大納言も紅梅右大臣也此人母二宮御母藤壺女御と
このまもくこの事不叶してなてハ女二宮御かうゑるくおりひ
しつかしそれハいまゝ梅壺大納言といつれし時のるし物給の
とおもうくおう

其夜女二宮退出大将之三条宮事
四月大将出宇治造御堂事
常陸前司女自長谷寺下向之事
大将垣間見事
后云對面大将給事
大将消息常陸守女傳之事

寄生　或宿木　以歌為巻名　秘

花　詞ニハ深山木にやとりたる蔦のおちたるなり

河　歌よりおこりしにしてハ木にやとりの様をいふしらへる也

一名寄角　　私此名花吾秘蔵等無沙汰也

かへりは葉とも木のいふかしやとも云けるにつゝきたる也

不　歌より本は寄にかへり詞にハ深山木にやとりける蔦なれは

ともやとりたる木ハ木のかやとらにてたもし葉と葉とさしそへてこそ葉

木にもれは枫の木のたてまつる歌よりおこりて木になれ

西物なれハ名付られていへる物のやとり木にハあるさるし葉ハ

二十一巻の表より廿二ハ此表にて二月直物乃次てに

任大納言道大将のよしいえてみる

不　此ほて葉ハ廿二巻より廿又の巻まてし歌にあらされたし横お

宮なかり前のまうに例なり別当く此まてにハ権中の巻なれ

総角にハ宮の御月系の巻なり年の巻早蕨の巻なりける

也りて又次のうち小擬て卯月まてなるし

秘　巻名以前号此葉ハ廿二巻より廿四巻のうちまてニ十年ほと也

紀ハ早蕨はてより八前のことし推ニ中ハ末より總角早蕨の
事しるしをきてかりて入てこそかのことをいひ出
さる事とも見えけれ巻しとも見えけるかたのことくしるしたるいとよく
東屋源氏の君のことは前にのせし此巻ニ藤壺女二宮のことをいは
んとて前よりかけるなりけし是物語の例也　義
義　寄生ハ寄生ノ一字をかりてやとり木と本にもあやとりとかけ
いふ也桑寄生といふなり

それは藤壺と申しゝは故左大臣殿の女御にたてまつりける
竹河の巻に今右大臣ハ猶もあるよしみえてより此かたにあ
うせ給へる左大臣といへり其人の御むすめにて此藤壺ハ藤壺
女御と大臣殿の御子ときこえしより今上の御子いまたに
給ふつりあひにていふにや東宮のうちに此かたの
藤壺の女御は左大臣の御むすめにて御時よりまいり給ひて女二宮をうみ
女二宮ハ紫上の御子のまたよりうへの事ありて右大臣紅梅ハ梅つえは右大臣
のことのしはしいひ此右大臣ハ右のさい京殿ハ梅つえは右大臣
とある給ひし竹河よりも葉のうへまてに右大臣し大殿の後
太政大臣二人女御ハ一品の後に藤壺女御今のまへの女
時より宮ありて明石中宮におされ給ひつる女二宮を
うしなひまいらせ給ひし宮寄生ふかくてより梅つえに麗景殿
ともいはしこそはなへにや
秘　右大臣ハ二人にて麗景殿としるせり明石中宮よりもて
くるしみ給へりとは右大臣右京殿には梅つえの右大臣とみえしゆゑ
竹河よりも葉のうへまての左大臣なり　義

花 見系器三君羅宗殿杯のえ出て明石中宮にわたりたまひ給ふらんて
の内なるへし
箋 そのほとりいつるハ椎本の姫君さしていふなるへし　右大臣にみゆとも仙ハ
紅葉より若菜のよせてハ右大臣なり
まことにさしてのことしさせし時　秘 右とより女御事ハあるへし
箋 今上春宮の時ハなるへし
人よりさきに　箋 わうしの中宮よりさきなり
中宮をハよびさらさん　秘 わうしの中宮なり
箋 前の東宮いつきの明石女御当時中宮たれハいふなり
うへに　箋 多しいりくるて同し
女らや一品　箋 今上女二宮也
ゆかしくてちかしく　薫つか女御のくて
此宮ほとけ心ちなる行末の心なくさむへきわ
御らんしはしもおもふ　箋 女二宮の御ことなし　秘 女二宮也
女一宮世にもてなし給ふ　箋 明石中宮の腹也
又おこしの御いとおかし　秘 又右大臣なり

箋 先右大臣按察なとせし人ハ繁昌なりしなり
ゆへしくしき事ハ　秘 女御のはらしてなりけるなり
十四にならせ給ふ年御裳着させ奉り給ふ
御こしらへの行のかきりまて　箋 右大臣のまなり　秘 女二宮也
女御宮ほとけの宮よりひかりしたいしにしさりて女御
秘 椎本の君しかし給ふくまさし宮腹の
箋 宮腹の大宮よりさかえるへし
うちとておかしたけく　今上なり
うち御しも女宮なるに　薫童女御のはて御可能事よりけり
又ハ御らいうの宮にくちら　秘 女二宮也　箋
いふかしくれれり　今上の御心にて
御年十九日出て　女御の七日
日とゝひさる世渡ひなく　箋 まことに毎日女二宮にひとひ給ふ
おもひよやうれ　秘 駕し外戚の不可然人なし
大宮もなりぬへき　箋 此二人女御の別称とも
秘 前右大臣の息女なかれ女御々しもりの時ハ佗被上東し花

御心ひとつなるやうに　うへとれは一心にえ友あつかふし
おほくの菊をうへてさかりなる頃
秘　むかし　秋まつ程くはしそこは菊の花さかりはさかりには
うつろひそそのしてしうつろへは色のまさるものなれは
まさる御事に　箋　此歌の前のあつかなつてえん女二宮の
うへとれはらんしらぬかせのなと
かはりうつろひ中の心のに　箋　うへとれは後なしかひき
なとはわけきらん　花　ありてうしのなり
私なしとかはなつらんとし後にはあへしとれのはれなし
朱雀院の姫宮は六条院にゆつりなし給へし
秘　女三宮の例と云給へり　箋
志からはいくやあなとてえさうしてもおかしなりと
花　朱雀院の女三宮を六条院にゆつり給ひし事あり
とは不足なる事すてえうしとしかくらん後にも心あへくおかし、
うるし薫大将のくやきし後て今によらし給ひしつらしあはれ御心
後にはみ見へくそととふり心なり

秘　えなとしいあみりらは心後なんなくちのいとおもしさらとも今云々と薫将
女三宮の御まつくしてはおもかしく出んとおもく御ちもとし　箋
花　女三宮は六条院におもひ給へしよりさかりぬと人もいひけむ
おもへしようりし後しなれ
御心はりあなる　箋　女二の宮の御方のけつに不意の心あやまちありし
わけんしなれ
うしかくもはらんさる世すや　箋　女二宮の心まう給今上は御後のなと
みや心うし後にもとさこあもかし心しあかり給し
思ひてそこの心わろく申すなる　秘　女三宮は御例なとし　弄箋
花　朱雀院女三宮は六条院にゆつり給ひしそこの次く申すに
今上は女二宮は薫中納言に給とも御心しくえうしなとし
りしらりこうへりしとて　花　こうへはえとしいへり宇治の
大君いまし程し心付まこと大ゐこうへとりに御心うるも女二宮
おもれあらてすのめくこ事なとしらちやせ給はる御心し給し
又不思いわくへこあるし
おりへ人まても女二宮なとつ給おもへはしけるには御心しをへしと箋

時と御らんじて我にあはするなるへし 箋
給はんはさやうの事もなくてうしろやすかるへし
秘 藤壺宮にては菊のうつろひさかりなるに空のけしきのあはれなるに
菊のまへに時雨おもしろき 箋 次第に菊を時雨にて面白きとし
むかしの事なとおほしいつ およそいへる筋の意也
中務[つかさ]はみかとの御子也 中納言源の朝臣也
定 上野の宮はみかとの御子也 中納言[かほる]ハ今上の御子也 中納言源朝臣ハ薫
大将也 此前にも人々召て右大臣殿の若君なとも参らせ給ふへし 箋
秘 中務親王ハ今上の御子也 上野親王ハ当代の親王にやあらん 箋
中務ハ御子也 今上の御子とし上野の御子一人とし中納言源朝臣ハ薫とし
らうたくいふ詞也
空のけしきもあはれなる比にて
まつかうなかめ給ひてもよろしからぬ
おほしめしたる様なりしとなり 薫のおもはく空の哀也といひてまさきとし
秘 勅答なりしを申さるゝ也
ねさめのおほしなされつる 花 薫のおもかけなるへし
秘 夜つかひにても御ことはかなき様也といふ事也
花 女二宮ハ母女御のなくなり給ひて後ハ物心ほそくおほされてくらさせ給ふ

似合ぬる御碁なとしらたなり
いさはなれ月日もくるしくてかくれなきやうなるへしとて碁を
うちかはしいてさせ給ふ御心のまきらはしに
定 文集十六云 送春唯有酒 銷日不過碁 ト云詩の心をかりて
いたつらに月日もくらしかねさせ給ふさまをいへるとにや
箋 碁局消長憂とこそあり
河 銷日不過碁 延喜七年正月三日御記 朝覲行幸也 大臣等云
還御之時可寂寥宜囲碁時懸物有好馬則碁局式部卿親王
与左大臣其間御厩別当春野牽鹿毛之御馬庭中一局給左
大臣勝
いかにそやうかれなる心ちのみしてなをさりなるやうにもあらてとて
よもすからかつらはかなき物はさらになくなんうちとけかたきを見給ひて 箋 とにかくにまかせたる心とし
これのみ物たてはへれと
河 賭[ノリモノ/カケモノ]
定 帝の物たまひける心御門の此ほとまさる心へきさまにて御女御宮の事をおもはせし 御女御薫
よろつのことなとにまさりておほされけるにやとの御ことはにても御心ちさし給ふ
花 女二宮をかけ物になされたる御心のかけたる物とあるへし

うちまけし賭ものして賭もたいにつけて女二の宮ハ帝の御かたの御心よしと 細
かけもの心ハうへにふかりけれ　細 女二の宮の心の御ゆるしなし
二宮は心にまかせ侍　細 碁ニ三番の内ニまけ二番ハ負し
まけにハ花と心ハ一定ゆるしたてまつると　花 おもふ花一枝ゆるし給へるハ
御女の宮御詞也　朝詠云聞得園中花養艶請君許折一枝春 細
折りて御はしに枝折りてなる　秘 薫ハ下殿して菊を折りてまいらし
薫 このつゐでの御前の菊をハかなしのまゝにおりてくるまじと
秘 雲上の雑といふへきかと 細
ようにいやうきしきにかよふ所也　かつるのみ給たまふ
宮上の花 御よわらいにまかせて御の菊たにこれをおりて給ハるとおもふ心
花 此菊はそこにゆるしてもとの御のまかきよ見る心 延喜御集
同 いろそふへくせていみしうかる扇のしるしかの見ゆるにてしたまへかし 依定家卿朱
今案 女二の宮の御ゆるしも心よくもちゐるる所下以下心を得て
秘 女二宮ハ母女御もなくてはしいてかへるへうり 花
細 ○ハ宮を御ハ菊し母女御と宮をまかせへ女二宮の御菊にて
後しにへし

ありしかはあやしき世よ　まさに真に薫の此宮を中人なるとし
まいのこゝろくせなれし　秘 かくまかせ給らへるの心くせなかり 細
いとやかにわたりて花の心によいとおしきこえの御子なと
哥 中宮と帰宮の御かたかけりみして宮をむかへて見くまし御心ミちなる
秘 女二宮を此宮にハあらへなし　宮おはしての大宮の中宮の心ゆへ御かたハ
もてなしてあまりて 細
よにも人ゆるしくれ　人こそ人ハあつかうへし
細 女二宮をは心にてもかへすもかへしし
后くれおはさんハ　花 女一宮ありしてるし
秘 あるしくハとし
御まかりおかせるありける　薫の絹なる心つかいにてと評して
草子の此よりきり
右大臣夜かの事御ひとくにさえりてはてよはとて
夕霧ハ竹川巻にて右大臣に転して右大臣ハ薨まつりし 但広蓮の女御
の父よまいらさりけれて左大臣といへるの右大臣といへるや
秘 左大臣右大臣に此られて兼子細なし 但此右大臣て花鳥にも 細

と侍よ乃つへしとさうれ夕顔ハ右大臣なりしの御むし
箋 葦の女二とて御諸乃乃ちし御むすめ夕顔ハそのくて一本六条宮て
そこ又ハ六つにしてとうりもそこいつもしふくとし夕顔ハ六つぐのうし
なつさりハきなりにハなもてと　白き花ハ六条の院大くらふに見えたりと
こゝろさしめんとし
おりる御しくおりひさしめんとて
河伊勢物語云むかしをとこ好なる女いくていよそれハ　なんとてつく
わつらひとふなうふれんいにもしとて契りしもの
貞信公 河ら御なしとらうれ寺につきこ悉くて世の御経ぬまとしてれハかうし
む おりるまつしきにハ浅不遇ていふ本みてあるしへハ蛍窓みいてを
きまろへ侍りみなき侍くしきうてハこれとうれるさく人と存よ
とうれろかくへおりるよ角かあるなうしひなりとてしらのま
しかつぬとりふなりつ
秘 そてをあ御てせさうる人をとお侍きてしらくれたるらんいなうしさうれとて
下蔀なうし御ところさうむへきうよろそれわしれなん御さうかのてわくハ芸
郷 とのめしこえ侍し 箋

なけかしきつくふ　花 白ねしなりてハ舞ふとうしとし
御門なよ舞りしめ侍ハ　箋 夕顔ハ頭中将のし女二とのうし
そしらけし宗よ言ひく　箋 うちとハ此る御夕顔ハそうしは
やうふハのうしたなり
中将よと御めやうふうとそ　秘 明石中将とちと恨しのうち 箋
花 白きハ此ならいしめ御めうし此中将へやのくたなり
きらしめしよりひく　中将ハ此なて
いとおしくあはれなく　明石中将白との御教訓やのうて
こ子よらハ此らしろとかうしとて　執筆ハ此弥蔵うこ又此う
侍とハ御よりて此俊なりとみへつうこのよみうし
人乃此世にて侍るよ秘りし　秘 是とのみをそしおりのて
あくへて下にさこ御りぬもしハ　凡人へて弁書一派よそよ
あるとまつさるあれとし見ハ白とも中に御指うへいつくハのうて
うれおうし乃まあつちなりつあみつしうたうこ
む 夕顔ハおうしとや高倉と落葉とと二方みりてなりしうるを
秘 夕顔実は御あくのへてと高倉の弥よ落葉とおりしも侍とし

箋 夕霧は此巻名葉の花用ゆ物なしと云るなし
くるあさきて大臣の子どもなり 花 東宮ふかりし 秘
箋 東宮は冷泉院の後の儲君(マウケノキミ)とおかれたり
なりたまひしよりて人々にもあつかさね
秘 匂宮の御事なり 箋
こゝろにしみなるあかりふかりこのまとて 秘 夕霧の右大臣より
花 中の宮ふかりとあるまうんとなりたまふ
箋 夕霧は実て嫡孫と云ふ事に紀して匂宮にそへて匂宮のやうなる
見えたるなり
梅宮の大納言の 秘 当時右大臣は右大臣とも是へは給ふとさふ
よりて前のひつけるに宮の御もとり 箋
花 致仕大臣二男紅梅の右大臣紅梅以上大臣として前の大
納言といひつけたまふ 致仕大臣のまつむすめなるへし
とうとの給ふ御て 花 梅宮大納言は中宮の兄也 紅梅は
世にしとて宮のしもしも匂宮の御すゝしく 但梅宮大納言は
此時右大臣し給へて梅宮大納言といひ時より匂宮は中宮

とらうきのするかうそりしは右と古人物語総角は時なり
秘 蛍兵部卿宮の御女まのへしらは梅し右大臣はかつむすめし 箋
ちのうしハへうは
秘 いつろ女三宮は徳あけもかのうしふあつるなるり 箋
私 此巻の年ハ薫廿三四歳総角は末と同年明春ハ薫ハ廿四歳
早蕨の巻としおなし 花 早蕨巻の名と同し
女二宮も御なやしそてかまし
私 早蕨よハ薫廿四の春つゝ此ありきり 秘 廿四の春し
ミ年ハ人々ありしハ同し此女二宮あて服そてかまりて三月
の中つ宮か蕨は出てるはもうるし
何とかしいまくと 古 今のあるし
箋 今とはゆんてし薫の女二宮の中まなに出りて給なり海にて
つまきこゆるへ また紀中と薫ゆよ人の前るし
なりしあらしてかの御えり海りしせうに
薫のよてし庭しうあてもりうぬへたまり
くしもなにゆやうハ 秘 おつハ御中りしあってそりとし 花

私　よそよりおのゝしきさまの人なれは前駆なとせさせて右
よういかなるさまにて　箋　薫のかたよりこれは源氏とみつ
定めよ新中納言殿をさしていふ成へし
それより人の　秘　守はたれ成へし
さて契りけるか　箋　契り深くとは深き宿縁やらん
しるしもなし夢にはいつり
口惜しき身なからもさすかの人にこそ侍れ
箋　源氏はつゆ似るへき筋なり
私箋　かの大君に似たる人とも見え
むしろなりけりはかなくて　河　反魂香し　余論
さんてしなさいこと侍れ　かくれたる女二宮は御いもうと成へし
右は大方よいのちもなくさめらるゝ八月ばかり
秘　左大臣の室は早蕨巻は八月しかし其下に白宮と云事はなし　女
箋　八月十六日に白宮といふ事になりし
二條院の西のたいにこ　秘　中一宮へし
箋　宇治中一宮へし

いとをかしき殿なれはさえ侍る　中宮は八月上旬の頃なるへし
わたくしなる所々　白宮の御方に住給ふへし
おもふゆへにては　箋　さうし　しらひてけるし
あけくれにうちつれ給ひて　秘　此頃秋の頃なりしかし
御はしは山里の人々ゝ色さし　秘　ここもとは山荘にて侍宮の頃なし
なをもてなし給ふなれはかくしなけれは山荘の里小野にて住給ふとし
私　此白宮のゆかしくのたまふ宇治の里小野に住給へとし
とりそれ給ひては山庄の御つゝみなり
二条院へ送りへらせ給ひてそのまゝ山里にとゝまりける御事侍るとよ
それにつけて山里へ住給へんは人々うち見て　かいなくて　箋
よれはさひしう東にはなれて
私　八宮は此世を宇治へ住給ふと
草のゆかりもふけゐ　花　草の中に八葦の仮住の処きれ給ひける
秘　此君は桐壺巻にみえたり
此宮は桐壺巻にありけり　桐壺巻に此詞あり
人のそこのほとりやうある　河　志てうつなりゆく人あり
秘　人の名節なり

箋 大かたにうたて異相なる故に人のみなしと今ここ人は斎宮の御きぬ
と中宮の御おほしけし 秘 大宮のみの葉のかたのし
こ(と)せよあつし御つかひは又かやう
かりはかり 箋 男は折ふし花物そへてこそ
それともしかういひてさかあらしと
葉のうちにもこそうれ枝左になりんと志御心へてし
かれさうる所まてそ 花 姉宮のさやうにあかくあはれとおもひ
ときりしは中宮のと御くらしめてうち後ろには世にしと
秘 さるさ御とは左れるし大宮猶まうしてまうし御をもとに左にて
おりもんと云つ所つり花
なに所もさうし私とはいふよ 秘 八月大宮御にいつり 箋
何ならひあれりのち 白文へは云るあるさ末もあそてら世に侍しとし
まる事とうりてありけれは 花 てかこれ物末つらるよ中宮御にとお
くちあまかうを此下ひくそうりていつくありみとし
秘 おとしられるの出来へ(た)れは御いしくかうらひまうてし
もはあかれ御 秘 懐妊のあるし 寄箋

わりさ所なるとはくおりけるさかり
りはひはひ見られれあるかく中宮のかやうしくしまかのとこうて 白文懐妊のるとつんおも給
さ給へそてやうよ 箋 白文はさんかふ宣命よおかりして懐妊の人
よろてうるやうあかりときこ宣命しれあそとし
八月よあやとくるの日なとかきうつそ 秘 六条のるし 花
箋 六条嫁姿あれ日給ふうるらう中宮の御心へやまあとし
ま八鹿こてんしにはありし給て 秘 白はいひとおりくらしおさてし
れつさんとはおかさりてもてしひもんてとふるしくて
とつおもひ所かと中宮のくるは宣うねと法しく気色とし
そうるまうる事なり
まひひらまとふしてあつしねと 秘 已下第子地よ非りけそとつり
秘 中宮のくるを現代ばく今一限定しらるし
くれうり給ふし 後は 秘 中宮のりてうりあるく後一日は秋かし
なくなかうりあるとしなり
ふくうしきさ御こさうりしよ 箋 白はふよ今よう秋られのあさんなと
若しききてはとあえるしと更にてかよけちるよあかりし給てし

この所ハはしとの井にて　　秘　なかなかはさんしの文の所なるへし
よくよくなからうちやすらひあらはれかたしとのこと　花　本云
所篇くらうつれん給なとハさてよりよ御後おりハさ者の家し
秘　つくさこみたる中将のくて
箋　なかうし給をとても一句に中将の所くはしくちりんとの中にもあし
秘所此にまるる篇くつれんをとなつうさいれして縁に挽給の
こうるの作りしてうる心ちて白文より見へく秋の夜に給なかうつ法
から中将ハ所々さくみふのし文王の子武王の弟とし西白くかうり
中納言文しいとおもしきさよさみかし　　葉の中将給こそや御し
わりれとおかれとなり　　白状中将給おもへれと文王の弟にて物なり
御心からへしわこしたる所々たれりとし
女こしいとさくしう有ゐ　　秘　大宮状あかうのるし
箋　大宮状あかうれおりしいつめしこるし
さるとなうひのからて　　中将によりれかうへあるし
あいなうやよかくゆよ　　秘　葉のみかわかりて中将給ところちよりかへ
やうれりのこうかとなりうへきしねとし

なかめしにゆつりかへしりん　　箋　白へ中将とわりそし来し
しつしれ人よくとこあて浅　　秘　大宮よし
ことそそてゆりしこれ人もふちりそあり
箋　大宮よくをとつけそあらうり葉のふありそありや
そうゐの所と給のし　　大宮おもくるし
人よくふとわるれ　　大宮のくちかもくりうくゐてまかりし
一つこふもえさしくなりけうく　　一句に葉給獻布しくちん
もいくみて中将によゆつりまかへるし
かいなくぬることよ　　箋　中将わるし
いそれをしいうさそうしたると　　白文へ中将給わりそし来し
めくちくわくうるよしく　　所めくらしくたり　秘箋
花　いやめなるきと
秘　給くしきこと三句幻巻のふとさ文へはこそれにれ白めとめこうて称もそ
とそめさ御しきこふうゑへし入りくと大将くらし白文給字治へけ
もてくいそ所つる来給ふりわけかやのちよみうかし
花　中将給白文よおいさんと葉のせう来し
わそわりきうし

秘 白き扇に涙おとし事し
あてさりしこそのかたみのなき涙　白き扇て薫の君へ中宮のさふらふハ
御目のとまりつへきるよしとかきつけられつゝて
そのあかりにしたるしるしをとゝ　秘 に付の筆にかきて今ハ宮ひとつ
事したなりしとあり
箋 浮舟よ自ら薫遺れる御方へきこえ地し
紀のさなるゝふかくみかつりやとなるへき女ハ何のとかしわし
秘 朋友交ハ薫匂へき事としあし　浮舟の御心のちるハとまり浮舟
事たり後のへつさいるし　女の心ちらいのとなりし一切人の故
なりしへきるし
花 薫の心よ朋友たるの交とも友よなくてのりと心つあつて
私男女ハるの方かしれわこなるへの心ハ朋友ハ何かと無故何とも
一つハいふかとしる心あつハよ人をこいとこゝろかりとしくあるるハ
箋 薫乃さまして家の本つこの御ハおりつて
私大将一人よ薫の心をつくしつゝ思ハよ自御つへあしして
かてしくつうあるハとこ苦かの地し

のハ人とむなつしくつへあり　秘 大将とし 箋
はつし物つへ給へるへし　秘 中つ将ハ大将乃中りとこへハおりひとる
もうゆしとなりし 箋　秘 陰陽方にかかり
ともつん人くハおかつしてつ
箋 中将ハ大将とも同し人へとつまへて薫へ大将ハあひなるよし
おかハれなりしるもあり　箋 薫へつしむへき事てなりし事
名よつのさひをなれて乙浮舟の入つる
箋 中将ハ白宮よ物を世浮へる事し大将のう世浮舟をん浮舟宮乃
何とうちひ浮ハさりし　かくよ別されて心るあるなり
なけハさして物のさいひかる　中将ハ物さる浮舟をもしく也心のめなれと薫思て
人のよへさして　秘 薫の心あり
さ浮ハつれたつしれたとしておとる浮しき　花 宇治のつ宮達て
秘 花 浮まなうとれ女房ハ女三の北方ふかつてうつてまゝつるたつり
さなりて北方よみるへ達てし宇治ハ宮つくらふかとくさる浮
まなりてかりしし也 箋
あつくあつり物ちきくもあつハれ　心つひ浮くあつし　宇治

の娘宮のなまうけ給はる所たかふましき事ちかへりて心えかたし也
おりひめもまかなふなり
あさかほのかれ／＼にあるかなきかの色つきたるをおらせ給ふ　秘　見し折の花　弄箋月
花　朝かほハ光源氏の君の花おとろへやあさかほの盛すきやしぬらんと也
河　譬日及之在條垣雖畫而不悟　注云朝菌也謂之木菫或謂之日及　文選数遊之賦　日及ハ朝かほの名
かりそめにもかきなされ　秘　秋はてゝきりのまかきにむすほゝれ
心の御よそへふんと　秘　二条院よ中つかさの御もとに二条院に
心よあるまゝなり
河　二条院にかへりたまふ三条宮より小たかくしたる　弄箋
あやきものふみより内にまたなん　秘　白き扇の御あそひそてとして
私　白き扇にかきて中つかさに参りけむとかけり　御かはらなり
さまれのむかしの所にて　箋　さもあれはとてはいの御かたに御
かへしなるをすなり
月のひかりのかけにて　朱雀院の御時よりの中のなやみ
かけて後の御中に　私　庭もかはかりなる御いかにし
さらにもまのかくれてたるにはかなし

私　天地の露儀し好色の人にハ似さる事となり
朝かほをとりよせまいる　秘　朝かほの色のなさけかなし
箋　宮さまの有様やうやめかしき露の深かりしをとりて
秋くれ又かの御庭やちかき御くしに枕めくりへさし奉る
の事といへり
弄　うしろ世をのかれて後なりける花ともハ枕にそ見
てけるへきとしらるゝなとし
箋　今朝ありたるのゆかりしくらかれ露よりの雨ハ露からて枕なる
よき花なと云し
女郎花をハえもいはく花　秘　好色の方ハなくて心偏なること
も　おもしろくしやしつゝてもこまかなる心ハ（ハ）
今案　朝顔の花よりハ女郎花の露のしつくにかくなくあ
そひの斎院の御名ときこえしは花の名をかれたりなるなり
つれなき御ありさまなるへし　弄　川にかき給へり
箋　光ハ宮の御上に花もそへる御心ありてハ好色をたのとし
明くれのちもひとつにすゝみて　秋の御ゆかしさのひく所の

あくつきしあるさまありし物し　箋　白きあふきのいたうこかしたる
せよらむとけなくあさいふ給へらん　ありつる男をこそめし
うしつけたりて　花　まうしきは迷し
能まうるれまうしきふかくりて　秘　不及川との事給ふなり
花　川との事をそれてなりし
花　川舟の詞し川舟男動く興へ無く
つくうしきありて　花　うちつけなる
女房の心も京へいひて　秘心　好みてありけるへし　女房の心も京へは
もえてしうるとたつる
ありて常のきされは　秘　ちれかり下車ゐまって
またの人のひとつかする　秘　白き扇の心へうしとめふとし
もいのいとさ給ふに　白き扇りしなうそれものやうよは葦の
みかひいたうしとし
給ありおさめ給へりて　葦の実清けなふてのみせむと
これよさつへてゆるさせつふとし　秘　ありつる詞し
りはとも此前か　箋　外孫たるを給ふうしれるたる

きもしもえさすりかは　箋　細しの心し慶し数回れ
うつはいく給へりらん　秘　内の女房達れし藁し
小ありてなうやせりしもとそうし　心　小面は女房の住居なる分兎
小のみしなとらてせなし御しの方とらべし内の内房なとらし
秘　葦の詞し内とふさつかへしとしあるへなるは葦の事つる早
下しておかって　来箋　私此詞のつれもつしきし葦の
折ちるさるへなとのきつうんよせとりなるやもと示へそ
小ありてなうやうのりられそうしとりへ詞しりやうふかく
むとふさしくある給ふ根しらるしよとりなるもの箋ふ分
ね庭つし南る所とりて
折れもみ身く心みされは　秘心　心てさうて根とよしへこる事の旬とし
私御心とは心御つとりて
わしこりてよ　花　あくてこれとふしちてなとお斎無きて
おしくなりとへりのし給へる　秘　男しきし　箋
うくそ給へ傅しわしかし　秘　中宮の心しつ傅しさも少なきとこ
なやまりしくおかさ給へん　懐妊のる御葦の御心まつて

さあり侍べるならし紀　秘　六人帰りて代にも侍べるなるべし　へなうし侍りて　花箋
海やうよ世中のあはれさきやう　秘　菫のうくふし
海そうの只世あはれらしとし
まさとふ侍べりとも　秘　大君ふよく似たり　箋
うらやましう侍べらんにこら　箋　大君の病中とふ物かたりし
へしちてきこりしきこえたる　秘　菫の句　花箋
身なりてたやむさ海またうと　いつはあとへよそくれむ身かとあ
ら孫子身といふやうくやしとりてまつふかなのこころにきこえて
なしとこゝそとしされてくらうなしきき来れそるあわれのしとこの
心うかなしきこてもくやしきこるまし　秘　かなしきるは大君の
うやしきこるとは中君の御方ゆよせさ侍るへし　箋
侍さうてあたらし　宮は宮の御世ゐる身の上なてはことに御心物
ひとりそれは身ものやうのうつりかこりのことありそさうやうの
東宮も飛鳥の余りさそてたてとさ侍へしよ菫の宮でし
やうしあはりてゆくも　秘　鶴うかとそつう
箋　権乃うつろふさ侍し

屋とうさしへて　箋　蔭中へ物かと入給ふとし　鶴のへなし
うちつくれえらへうたへり白露のちさりうあはし鶴のちさりへ一川なをし　秘
花　姉君とまさいへくらんともうんと侍べり
箋　世との人のいさと鶴のちさりへ一川なをし
秘　花　うつれ月のこのつゝ侍たれはたなう
まつひてしまりてなさぬり
箋　秘　菫のゐ退て鶴のあはいうり给てかくれ露もたのまぬとし
まつひてしまりてなきとは紅てあとさしてちきちとのつゝ露なき
とうたるうらし　秘　露を主なりとし
中箋　きてあそにまとあるものなるあく露を紅きまされなな
箋　こしあるは露の侍ねるとし　秘　下句は中君の自嘆とし
花　侍ねにもとあるは姉君のうそそとも露は中君の身にはそなを
侍つとゆう露紀ろうかたもうし
侍りうなをと　花　川の不見　箋　川奇紀う跡くと
秘　ひくうなさは侍るうかろきとし花あれ川ゐ不叶歟
同与君諸新婚　菟絲附女蘿 古詩　松蘿𦱠夫妻　奥入伊行尺水原以下一同

今案是ハ中宮の御乳母のくらゐりして はゝの心のけしきへさとよ
あはれ所へかれなるなる可勘付之
む 萩原ノ秋の御うしれ萩まろハ御ふくろしる花とみえくまし
と案此事れ心底よハあひ給ひれ所くかの斜 御よりまゐらせ
よあり給なへし 此しれハ萩風露のあはさいゆよりれるといふる
底よハ相叶へし 未見及のよかし
私 御むも侍あ給ふ識にもなかりし 但不叶由被注之 此説皆注之も
まいりそうろしき　大宮御こゝいつるも
秋の中ハ今はこらしあなめれ侍さりなり
秘 萱ハ中ノ注ヘ御御へる来と注り御へる乾中腸断是秋天の心なる
菅 萱ハ羊也ハる熱つまる成すよ種よ秋も物なるへし
庭ちまつり御て使とし のいちしあましそく
御 星るこあまてヽへるあまりかり 宿なる御や庭て籬ヽ秋の野ハ見
私説称不識之　案引并同
御説乃ハ世御ひゝく後二三年比末に世御をむこゝろひし 嵯峨院六
条院の御さしけれくへのゝおさあんつこなるなん御りける

御 六条院追せし御の乗此御よみてより嵯峨院ハ極楽院の御御房なる
乾此御けつ れたとくらゝに 是ハ此院とハ源氏し源氏の
御せの未二三年ゆ追せらし 嵯峨院といふしさゝく源氏出
のひく後披嵯峨院みても六条院みてもさしれくへきへし
ることわりしとし
む
水原云 世御をむこゝろひし 嵯峨院はる大ぬこ不得とく是不審
御海云 六条院追せし御りゐる 此細よりみてより嵯峨院ハ極楽
院披御極楽寺れとも　今案 六条院ハ六条院とや披院と世御を
後二三年よりかれ末世御をむこゝろひし 嵯峨院と六条院とは二
れつくへのや 御へハ本案れのゝかのあれ御つけくてゆと御
御しと是ハ大将よ御のゝかくをる人の御くしとも 此院ハ生とと不
くらかれなるかひく 嵯峨院よ注居し御あれとも幻きて此ゆは乾識
御すくしりよるなふよりて 本原称ならとのいハゝ給ゆうち御やハ御
御海よハ乾識の院とせハ庭ゆつ極楽 ふよりて六条院注居の所は
御よみかるひし あるさかれらハ源氏嵯峨院と極楽院乃極楽ある
御まれと称られ所るハ注りし 嵯峨院とハ大臣さ御へらし 大宮あるハ

嵯峨天皇の離宮にて脱屣の後嘉祥元年に嵯峨院にうつり
給ひし嵯峨の皇女にあり貞観十八年に淳和大后公家に
奏し給ひて寺になされて大覚寺と号す居住給ひし嵯峨天皇昇遐
の後淳和院不被臺樹亦壊といへる事忠史に載たり嵯峨天皇
の嵯峨院に世継のたくひもあるに今六条院の御堂にもあらし
なし給ひしよりこそひたるはしたなるへし 此言治定の御堂とする説
あらは前代の物語にかなはて給ひ給へり 弄花
箋 是は帝にへたてゝ嵯峨院の事は花鳥に見えしより大覚寺なる淳
和大后公家に奏して大覚寺と号しなとしたりといふ
花鳥に云淳和大后とは後淳和院淳和也 箋 花鳥に家用く
かの御あたりの人にたくはへてかさねん今に 秘 六條院也
花 是より六条院の世継かくいふ六条院に御ありし人にてあるし
にうつくよるかたちつ 箋 六条院に給はらひしたくし
これより世は院にたまひ 是よりうしくてはや世継はりおきし
其れにしか仮へてもいへるなるへし
むかし月にはくるよ りのしかかたれからわり

秘 故侍従これへ心ばへかくしてよそへて久方も彼
わすれ草おほひて
住まへとなり 箋
花 おほひてハ生ひてし六条院あまりにて後よりよりより久方に
河 毛詩云北堂樹萱草能忘憂或は萱草をは忘草とも云也此也
花の忘草にて此草を忘しと今は外にはいはれは此草にまて墨く侍し
忘草とは萱草の一名也又萱草は忘草と云よしを付して忘草
といへり給まてお義也なり
此名のおほくも 箋 久方なれり
むかしかへりしうるやうに 箋 源の世につかはあるへし
気にひたなれかるしさ 源氏はくれぬるいし 時のあるし
そのかへれるしさに 秘 六条院の世には給はりは
おのれは萱はいもうし細かなれるしとし 花 弄箋
それらのちらされ安しをて 秘 大覚はれるし 弄箋
おもしてくよのつねかさいうのしひなれて
秘 同しくあるなりひかまてなれり
箋 源の時ハ本し大覚ハれるりも同年也とてとし

私云役ハ浪所ノ役ル所也如斯書之

つくしへくゝはまさりて歸りまかりや　秘 大宮ハ志つしあつら白との
とゝ人なりし事ある男なりといつまて庵つくり侍りてといへりとし
私云秘ノ義の中意ハ業の家なるし源氏の御時なり世の行々想
しひくらし大宮よハ業の意の慕ふ意ありなれはおく飛
ゆう御屑りとし
なれ侍つるかし　行る人の庵し
はつし人へといひしも　花 婦人の行るし
裳 大宮のうはさかしふるの中宮人たりとも此業の家をとりて家
なる人し御して此のしれ拙いひよいうてとかくの御なれハ業宗
りうかさきてわしかりかく言れし中宮のくし
秘 大宮ハ志つしなうら白きてう人なりける御家の男なりける行うそ庵つくこ
めりしと云へりとし　私云此役ハ前役よ上り続てとまる不審
仍此役の役うやと存しあらふ此集役ゝうし
喜しありひつし歸る　業のくふて中宮人の許とはるれなさは
世のうさこうり人なとへのひへし　花 中宮人の御山里へ
山里なる拙のわひしきてしらてあましらのうれしういふ

秘 門前の山里ハ拙乃さひしき　中宮人ハ山さとまてあひくら
行々よしも世のうしさてとハいうとあれハ云るくらへきる事もあれ
と昨今ハ世中うらし行人へてすてハ世のうさよ云ひらへく山里よ
御りきれへの出来ぬましとし　裳 門前竹下同く
兼此居ゝれうやましく　裳 兼居の宇治の居しるの浦に家とし
私居よ住うれての事ふて人ゝへうれ
此うりかあそうりれかとハ　花 有文此后ま自洋いつて
花 八文此年三年れくて宇治へりくおとるうやとし
秘 又文安三年して正にも御義とこ不用し　裳
花 此此羽為男三四為年上れ来羽よりて三巴つりおくし海
花とうて白いうひそめ御へくとよりて又例乃彼此上自此続
花ハ九月し婦人の上自と此羽うそ此まてれくし然ハ稚うち織角
乃時ふかうり此事とえてとうへ
うのとこちる此滝のしるし　宇治此行宮人御集此寺し
思ひくうとさせるのひてんやし　花 中宮人の羽し
あう侍しとあうれとも　秘 業人の羽宇治のなかれる

花 くりかれとも　蓑 八宮なり
古宮の御忌日ハ八の宮の御果に　私八宮の薨去ハ若菜廿二巻の八月しるし
花 年忌の未定
其比ハ案れハ八月なれハ中宮三年忌必定なり
しこハなにかしの法事にも　孟 宇治の古宮の御寺にやとりへたるにし
秘 彼宮の御寺になるもへしとたなり 蓑
花 宇治宮の御寺なり人々寡きをさんとにや
つらしなりへき御事に　しもてひとり雁乃むらにあはれ寺なり
なうて八功徳乃池への功徳なるへしとし
わたりへらんやうに　蓑 おもしろくすなれそのて
御仏なとも乃よりて　花 中君乃なり
秘 中君ハ宮乃君目の後は君のさせきて
宮ともなりけりやなると　蓑 中君の心中に宇治へ移らるや
とのすみてもあり宰相ハかしやすこしきこへきやうれるなと
わか宮もきこえしなり　秘 かるる北をしし 花
いはらへもてくれのともおほしかり給ひ給ハ
秘 宇治よそてもつく物なにもかへらるの御なかにわたりつし 花
私 何事もそとて此御なにものなき中の君へのつりつりもつくしかね
よありしもいかなるよりけりきようし
いふうらやうにも　花 大かたならぬにもあらんとし
蓑 見ゆるとのふくもいはれさけんとし
宮乃たちまちにおもひにたえきりんし
宮のうらうきの不定なるへんと　蓑 白宮の御かたへの葉
さうひの宮さうなき大宮なれ　孟
むか さうひの別当ハ故右府乃別当し大宮ハ大宮し
秘 さ宮ハひの別当大宮の大夫とる大夫なるへし 蓑
花 殿上の別当し　白宮より八大宮大夫なるし故同なるへし横川
同白宮は別当は大臣補名し第に花の御たなり
[illegible]
よそへてさせ給ひぬとし　花 白宮[illegible]
宮の御[illegible]　私[illegible]

宗へ入たまひてさせ給ひけるんと　太宗まて又入つ仰し
なれはこの御たひのさた御　祇 中宮の御宗まうし
蒙 かけるれなりけるなり
なる心なりけん　太宗の子として中宮は御とりて御は心のまゝ思ひけるとおもひたりかの心
しは蒙の御心はいつくなるとそてこれとおもひは心ゆへ
あまたへのらおもしさりとし
なるをやへ御りたりぬへ心なりんと　蒙 白へ申中宮は合をまても
今又太宗の后ゆよれは入さ御かりしそのひとてなり御へ心
そのまゝをおもひこ給ひはさらんまて　師 撰さとし
拾 御中宮よりかれなくうら撰をとらちなりし一句よ撰をとは心を御んれ
祇 太宗の後蒙まて撰をとらふかてまゝし御たなりわ
なくこをたゆいとをかへく　ひ 其はかりける此女宮し
なるは心の中宮の御はいとかやらく　蒙 女三乃御心て蒙の撰をとらまん
なるよらの御らぬを御のなりやうし此なりわ
拾 女三宮は蒙の御ありしをおやうくなるへ心をとりて入ありてらしの御へたき
いかゝもわらしとらさしんかてしは

師古
いにしへもわらしか身御かゝてし蒙の御まて心のよ心ゆ
世中は心ゆる捨給ひけんとそゝかくて心ゆふくは御をけれ心へさたけれ
蒙 女三は后宮さまそてもう御をは蒙の世は捨おのかくるともさ御の心まへ心
にゆるわらしけりしさ御をけしをへは入后宮の此身小なる飛
御さ来しさりかへし蒙の世は捨給て女三宮は此相ゆて心
蒙の御おも御は婦なるらりし飛源かるへしとの給ゆて
てらしけなへいとよしくて　拾 かけるれは申し
おもへまてはねたるなれさゝ給　拾 蒙 御はおもらく
祇 おもへゆる女三宮の蒙の蒙 御心はてるよ后くらなさ御は　無宮とは
えてしゆてまうつしとさ御かてり蒙
たの大いとのふは　祇 久寿なり　拾 蒙　久寿は白河院へ
よろ河とらしのへて給ふこしまゝふ
のさ御なり八月十六日なり
かりしなれは　蒙 白宮のとさてくおいたる御はよ
いかしまれ心まいぬてしかく
あるいしのへし　師 案内し

花 内へ入と給ひけりてし

秘 夕顔白家のおもしつまと給ハさ御供いつしと給ふへし

おほそ人々も給へとて　秘 中宮にし　義

こよひそこなんとしへなりなりけれハ　花 月ゆるしけるへし

秘 今日吉日なるへし

御子は坂中将して　夕顔は宇多院御後せ六宮にて一夜し

夕顔 大宅の月あすのやとる鬼宿ふさ月うるひをはくあへしあくこそ那し

む おほかたの月あすのやとるいう我をともにかくやるこそる

秘 元良親王ハ大宅の月──と花あつまりつ給をとりけりへるわ

義 月とは元良ことを給ひわまよこなかく宿へましてはさふへし

花 秘る用し物語なとにすこしより来事なり

あるし申りし　秘 内よりおそくに六条院へ給ふきかはんて

義 中宮ハ今宵もしむきしくとお用し〻となり

御文ハのし給へりなる　秘 中宮へ文給ふとを給へり 義

ほくりやいつしたときん　秘 中宮の御返ゆるハいつとへつんそん

二条院へはとうり給へり

花 白家の御程より中宮の御かたへ文まいらしハ中宮の御返いとなつまりけや

又二条院へ白家よりおくらしもなとし　白家中宮にて二条院まてし

わかもとは月のおなかはしそく

おかよりふりてなりて　中宮のさ夜なりわ

中将の気かり給ふ後　義 夕顔は使は中将なりわ

秘 坂中将し大宅の月さへ後となるものこの御使なりわ

かもていておしくれと　夕顔は六宮なるし

いまはとそく夜いりらん　秘 白の詞し

出よわ月あかし給ひそよくへそらなれハいてしくるしと

義 小町集に中絶よる男はさひしくうれ給ふく月のいてしわく給ふ

とうもそて給ふをして口惜くれして出のほよなうめたれハおと

いひなる気出しいて侍さうねさ夜ふて

むとり給ふのひしさけなおきわつ月はありれといふそそる

莫對月明思徃事損君顔色減君年　白氏文集贈内の詩し

後撰月をは飛給ふ不りつて白論ハるかのかう白家は月あかく居

そとあらんハいうくるへり

かくれの方よりさし出給へ　注　二条院寝殿の東の対也　中宮ハ
故前坊の姫宮にておはしまし
冷泉院后にておはしましけれは
花　渕川をわたるやとまれハ秋好のしとのまかなくしたまひてさるらん
まれなる人を思ふ　箋　しかしたる人のさまハ白玉の縁命と
かく思しきよの契りはへりしみちをしらへてもさそ渕中宮
の御ためハ仰ことのよし入のかねるも秋好の井あるハかへら
とさまあるへし
世中にすみつきてめつらしきさまにおもふせうし　一流の
秘　八宮の事也　箋
花　八宮の事中宮の人なり
ちりけれわさなりしき本意の事とすと　河　卓文君人流　遊仙窟
人のおもなるやうなり　箋　八宮大臣の事とすへき事
私　流の字をひとしく人なるへし
あけかれにくもりてなしなるに　箋　白宮の仰さる渕中宮の
おりてしさまにいらしもりかなしさてもかれかるかなしとし

はつ　いまめかしくいらんとかし　私　右大臣の事を仰るへし
はち也つさの事をひかしと云へしかるハ一條月にて中宮
の事と見てたなり
ありもし世にかへなる仰るかし人にいかゝさてられ給ふて
花　中宮の心も又兄君の事ハ北にかれさせんとか仰
寿の白宮の葉のをもよるもさるかのみて給ふんと云へとさ
わさりて思はれかしさとい
是ハ其人のやうにみえさせんまし其人にてハかしかもあるへし
もとよりこよひのさまにく仰るつゝさいなくへん秘かしとし
箋　是ハ前の詞をくらきものゝ人の心とかりと私かなる事也と
いへる始末なり
秘　はまりに後そて仰の事ゝてハなかれゝもとれつくさハ思ふてはまと
よのつきかし人にたよりくさあんとすへ
わかたへくらたくさあん事と云へきも無あるへし　私中宮の秘する
行るおほえて山の月をしるへにて
河古　くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月
和泉式部

紀〔後拾遺〕月をそハあれはしらぬ[illegible]山の端の[illegible]
今案 喜撰宇治山の月をハ大和物語によりてよめるよし[illegible]されと此歌ハ喜撰
[illegible]山の月とこの[illegible]おもひつゝけなし[illegible]初にかく
さかんとこそおもへ 喜撰山とハいひつるにや 人ハ月ハ秋によみて
[illegible]おもひそて山の月にもとおもひなすべし 又中云此白宗[illegible]
秘 秋なる[illegible]山よ[illegible]へき歌也
或 [illegible]めくらへ[illegible]いつか[illegible]月[illegible]て山の月しるし 義
なく[illegible]よるへ[illegible]山の月なるへし
山下[illegible]ハ 義 宇治とて二条院[illegible]
この[illegible] [illegible]
桃の葉の[illegible]おもひそておもひ
同 家まそてハ[illegible]花[illegible]桃の葉より[illegible] 友則云
紀 椎[illegible]
秘 [illegible]桃[illegible]
紀 椎[illegible]宇治の椎の[illegible]
義 椎の葉[illegible]二条院の[illegible]松風[illegible]
集云 宇治山の風[illegible]椎の葉の音[illegible]
[illegible]秋[illegible]
秘 白[illegible]
[illegible]
義 [illegible]庵[illegible] 秘 [illegible]
月[illegible] 同 後撰云 寛平[illegible]月[illegible]
[illegible]
新 [illegible]月[illegible]明[illegible]後撰[illegible]
秘 小町集に中将といふ男[illegible]月の[illegible]
[illegible]
男[illegible]
月の右近[illegible] 白[illegible]天[illegible]月[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]右近の[illegible]

夜ふかき今宵いつるハ毎夜ハ旅の宿のみつからるの御気色
をこなしなし　私云此文箋よハ第よ月しをもり給のまかり
此詞ハ一　此前乃ふてし又ハつゝや姫月の面白う思ふ御ふてく
思ひわひし花にるゝちつき侮しわたる人月乃かゝえりハいひしとつて世ハ
しのひしこゑうえとをしハ今宵よハ月よとくゝていとしくなりしぬ子とえら
ちうつくさ御心くね　秘 慎嫉か
ゆかしうありいそくり　秘 太宗とくく不食否のひしらししとし 花
此御ことよさりともかうて　秘 白文に作るへし 箋
さいへともあのいつきしかく
花 中宮ハわりしらみれ人のれいとしひわするたらわ　箋 中宮乃詞
いつみもしくまてくいえさうえ
私 中宮のいてよいてをつしとおかをそん
思つみてそ　箋 女宮とくく白氏の心のまつ思くらんとし
人よハいつそうし我身より恨しけれんと　秘 第子論し
箋 中宮乃心代ろ見してつまり
それとこの人とた　中宮の詞葉つへし太宗の心合し事前なる人の心

文ハはしくらうしくおほしいつくしきよし此比くらさ
箋 白氏中宮乃事御くるしく覚さし されとも今めかし此人
もあくかとくしきさらし給ふて
まちつけきこえさせつる折乃　秘 六条乃御事也
人のなりて　箋 六条の御事なり
いかなんさのくしく　秘 白文其かく推し給ふと
あさやかにて いつくへてゆるやうなるかたにハみなく称かうりふ
箋 是ハ六条のおりひめまうふ人とおもちきこえかなかうりなる称 称
なよやかなるさまにてあへしとおほせし
秋の哀なれとおもけなしかりけりや
花 おしならきこえてそてぬらしつらつくらよ人へしれ秋の哀なれハ
箋 思へしくこふたくなのよ侍るかたも思へし　箋 中宮の君ゆ寄し
ゆり給へくもあらへかなと　秘 六条への後朝の名し
御文つらさの人に字しき　箋 此前の人て歌とちらしよさ侮し
おほ人の人て給ふもろよ
天下ふあまり給ふ　秘 白文の此くるよ中宮よ給ふまくれとし 花

私白氏文集の心世ある小草堂にして花おもきにもさしのぼりて六
の空の行しるしハ夕霧あそびけりてをやし行をきゝて
中秋の心おもしハおもしろくとはたし對の心をかへしつゝもお
多くハ白氏文集のへとも心みしかうしたまひたり
御ありもあそびこみて
兼 六条の院の光君の寝殿にかく後らんと
光君と秋の好もおかしつゝ又まことの色てふくうれしとしるして
いとゆかしみ乃てんへおもへ心にいとし白氏文集の心あり
いときゝゆるし給ふ　秘 中秋は心にまへこそうちまつり
猶しくをとり心ゆらゆら　秘 中秋て
兼 白氏文集なり　秘 中秋をいつるあやまりなき
私白氏文集なり
わしらまつりてあまして　兼 中秋ハめしかつらハいつくふかく思に
あはれあり給へたまひ
らあそし給へるかの　兼 此秋なるハ給へる君給ならへし
あひたる紙に御まつく　兼 白ハ中秋の心はおもへてし
行てくしまやたらしうつれしたるやまりけるら

花 ちうえかさてうるし人のありあるまゆとまよくしめるなり
私花鳥余情　私云すらしもうし心ちぬことさんの
為よれのへとえたまへし　花兼
なとうれしたりやうしけれる所に宗本文あり心　秘 白氏文の詞
ちくしれのとまもちいくくし　兼 八月十七日し
さ御くまきさしる事もし　兼 行後ゆもなりうへし
なふかし海弥とそ　花 その人なりしこしくし誰ゆもなるに気
うおふゆてしよれを　秘 うく実あなるかうしとふくれのうち
の人れしたなり
花 ことより八実なるかうしれるうくれのかとうもしなうゆとし
いつくさことしきんましいたうれい六
兼 わすれまいへ給八段との行八ゆ石かへ中秋の心に　秘 中秋の心て
中へのは似文をさゆりて　兼 人へたるへしれてしかてしゆ下
そハ六条の院給へくし中秋の月なり
いさうてさやうまりて　秘 白ハ詞しさりやうもいひたらゆ
まうもつ下みんのたしさ行くやうなるりやそおもて伝ゆる

まてしはしとた頼めくさりやうかれなとといへり
季 白玄の謂しさりやうに中宗れいひなりし法へしたれくハとふる覧なる
らんと思ひつゝ定法かて題なてあさくる歎ある時て和歌多まくして
あしかて此歌もしとすへし白玄のあへこころえてやなり
秘 六帖てし 箋
秋又とゝゆしききこれ
此人さしとあるてあし切思あり　いふへて此人さして深しとし
されとみんのえ分とハ　箋 白の庵の心を偽りてハなし中宗るもしよ
時た法師よ契りのあふなり
命をつなきてつし此人にて　季 あはれ今年の秋も待ての各此心て箋
拾 古 あはれそみ氣もつりての秋くゝりとふる来る先年しころ僧と那
秘 後世まても契り法の心もうや此世の契りハ思ふやり
なれハ後世信してあのもへかれ也　ノ西日也 箋
後の契りや宇ちかゝるけしあれと思へよしと此のりとは後て又
とも思のまゝれぬへかれとして
箋 此世の契りハつし此人思ひし思へかれハ後の契りも思ひつゝ
来りやしらつらりとは後よみても思のなへしとし

拾 こうりとは後よみとも此若の宗あへしへかくかゝる世すりとも思ヘハ
称んとへつあまて　箋 中宗への大くとわれ法世に法まへかれと
法のこゝろまとてめくるとし
ひふハなれあらハ思　箋 中宗の月法世と法やしうし前よみてわ
おりし法とこ詞し
月渡ていそつうこひくりとみて歎しくと
こひありもるてうしおかハれハ　箋 男の枝なりて人をよおさ　秘 中宗の心て箋
まてつくるに古よ婦に宗実なとまてつやりの時といる都をし又守
法へ帰るへきこえつゝこうよくりもなし
いふたえりくらひしし　中宗の歎なゝとえりしく
こうつしておかまとてあくハとこゝふハえさめしりぬなとしおり法く出う
ころありくりしもき法りく　箋 白の中宗のおそむきとる得やうふ
し法のえたなり
きこゆるまつしあくれなる君心てと　秘 白の詞
秋風えてあるはにへてえるけれなさうれハ秋のあかれおありかいらは
地言ありて宗の成此心えてし宗る思ハ庵の心ハ偽りて法のへるまて也

よしさりつゝいとしるさかりけるかなくハて秋の夕にならふる
御心なんしとみ侍るも白氏かことは引たる詞也　秘 中宮の心なるへし
秋の夜のあはれにもまさりてその露ふかきにつきく
箋 白氏秋の夜のあはれにもまさりてこれの春のゆふへはつゆけく六条御息所の御ことうつりハ
推量なるへし御詞なる所にくしくして六条御息所をしのひしるへしとし
宮にあつかるや　秘 白氏句中宮をさして此のなかし
おもかけのはかりのいひやる　心おもさしたくふかくおもふかくも榊院云ふかくも
中宮の御白氏のかくおもふなり
まことに人のよきそれにもいひなくれハ　東人の庭よりとれにありし御ことなるにいひ候し
中宮ハ諫果たりしとし
いとしくおもひとえりしつくゝ中の心をもいひしもあるへきこときこえ
箋 六条御息所の事葉かつり出かへハ云えかりけて行くろひつ榊院云堂
なかしくよきかならハ云院の心をかけけんすへきにおもへし
世のことりかへらぬなくあはれにもらうれ物うらしうちおかれ
御様なとも女のちかひのありかを中宮の御白氏ゆへにかならす
よろ御門のかしつとて　秘 中宮我身のことよかしてし推量給ふとし

母中宮のいうかくしとおもいゝへて身をとりなしもきらう御とし
身をとりなしきねありさ候　花 宮の人あり
御いそかせてもいとひとかりうれならうれ物とも身をうしなひもさほとそせおかりけり
箋 白氏御心ともますそせぬとし引く云なるへし
うかやうなるまてあらハ　秘 春のあはれもうちあらはれてしとし　箋
花 白氏総なとにつきしあやうきかくもわれハ中宮御方ふて云ふなりへと云
そこやとくとこりつさとかりけり　箋 春のあはれに云々そことしれへ
御しかて御ふかる出給へきよハあつれいとも
気のしもてなし　箋 いつく今かくらそてつとしり云なるへし
秘 文殊さしぬとふかんたくれはくかくやさらにへやとくあはれし
花 えうさらぬ今ふかんとてりなまれのあり
うこれあくまりもし給へる法使　秘 六条院のなるへし
そかりへきことも云なりて　箋 法使中宮の御方へ八月之のへさまと
此主なりんありてよ　箋 中宮のおりけるかたの声ありてたかわ
おもれるかあつらしきさらに
む 後 おもふさんよりこれらるあつしるりんかさり也女御院く方小

万葉後頼の父の俊ゟ頼の家にも伝けれはと
兼 むかしの末後撰まて大体かやうなれはそのゝの時にもみな例あり
秘 万葉の末後撰集に続いてあり　箋 これ物なり
いひのかくふかきにことはつらん　秘 白ニ文字いひのかくよみ定し
くさまらきのつくしんとあり
箋 今続て中宮のうへおほくなりしいひのかくふかし
やもうれしきこんし
さしもはれにおもしきれ　私草子也し
兼 からつけれてゆ　秘 さしもりしらつけれるし 箋
もらしれなるいはあまてと　此文の称りほこらかなとし白れるし
女房して此みよりいましさせのへ　うなるてみな白されら
ふくえあふなり
右にそうれさ阿るまてなりしそそうんと　私中宮へれるし白れるし
まつ母のまれは世おありと　秘 藤葉宮し 此六宮はまゐらせ絶 箋
兼 まつ母のまハ藤葉ゑし典侍腹の六宮は村まひ給へり　はなり
花 六宮まてまつ井房の此後しかつ母ハ藤葉ゑし

私花宮乃家あやかり秘乃家より
ちんしうれりてうらうらゆめるしれはさや　目前もうつりてやの父のなみ
と中宮れんたるかに六宮ハ御よハ速也なりをまかしそまいとうし
ゆめしといひ申事よ此よ注しても我もり　花 宮しハ父の詞し
ゆしらハこうらしてまさる
箋 父乃詞し直有の此給いひてし
私さうしらハ進心ゆるてしさうしあはぬ　六宮乃さゆすみなゐるて
なやものしけるて
女宮藤葉宮六宮まいりて
とうなしし給事し我も事とき御部家のいふかみにとまちぬ右御なうん
秘 いふあれかれいし八藤葉宮の六宮ゆえ給へなるへし 花
箋 六宮まつハ六宮れさ御しいふ露のありしるれりる右御なりと
起りうといふとてありけり
私白文此命ハ十歳とねハそえ女房とかし使給へるやや
こころ御心家なりて　ゆこりなり
む いふあれりる右御なりんとりふ古れしとくはひとり
秘 白れ翔なり此命ハこころかなりとあとし

箋 うちとけたるかたくむつましき事は白氏文集にいひたるやうに
かやうにてなりしとおもへとおもふ世に 秘 又おもふ人なるへき
まうけの所となれり 花
宮の人の中にたゝやうなる事の 箋 宮の人としてやうは常に
ゐたるひとの所女の為にくるしうて人の心をかれかならす の
あやうなとは常にはなくて中書王の為にくるしかるへき事なる
人のこゝろはかるへき事にて心へとも
おろかにくるしくは 花 女はくるしくおもふ事
されはひとへにおもへとかれは 箋 白は詩を作てこそ
人とは思へしいとおもしきこと 秘 中書王は理にはこれ男よりおとる
いさかひなかり 箋
これはかしこくゐたるへしことは東の地
くるしき物かあらし涙ことに御にくく
花 六条は事 私云中書王は事にも 笠 花
秘 中書王 箋 私中書王の今は様にも底ふかは筆ひとへことにも
花 白氏は中書王御文の心はちかひてしかも筆は人によりかならしかり

こゝろはくるみて 私中書王の心 花 箋
わかれよりかなしきものゝつく 花 白氏は方なかりし
私此事白氏わかれより中書王へうれしきかよりしまし
うちみちたるはかれはわたくし 中書王の心に慕嫉妬のある菅
よりちかくいひそてある所いはてつれもなきこゝろつらき月を
まありてこゝろある
文を書てうれしう思ひ付たる 箋 白氏中書王へ書よりし深切なるを
又人かして又はいかにてかせさ給つ 中書王へ事なる人へ書はし
花ならは所あはせそうせさせなとしつゝとありて酒はあらん花は
食物は信する物の飯と物あはせといふ合るかありるよあらん花
とりのやとあり
これはまたいくつかさんかるよりけり給ね
箋 六条へおはしますとて二日のなのくるしのはし 秘 中書王 箋
物あとつし此人の 秘 川原院日はくるし 花 箋 云の人くるし
日くるしの御あそひ

河 むらさきのゆかりしるゝ心あさからぬ日ハうれぬなとおもふハ山の奥ふかくなる
箋 宇治へゆくやと見えまれかりし
中君 大との（こ）ふきう（宮）に移りおはしの思ふ心ふかしき秋のあはれか
秘 前の山里はまかり宮々ハ大との心のあへき物とし 箋
花 山里にてきく人ハ大との心なくまし物とし
こらひかたしとおほけぬよ 白は六条院へやかへおはしなし
あはれにはかりものゝふ 女のくし 秘 かくし
河 色にして物ものこなけく夜の程はまへのかたにあはれそ物なる
箋 此前周中君のくるし
ゆくらんかと 中君のくるよ白女ある桃花は深くことなる
かくらふくすかりける也
くらし見ゆりかしくせ
花 白女は中君よ物おもり也し事 秘 白女の気よさ宿へのとか待るなし
はかやまし給事 箋 懐妊のある
気おもしなかくらかく 花 其条し 箋
秘 母も帥をも早世の事したなり 箋 白女の中将のる
又いしつゝみもしあかなる物もとし
秘 懐妊ふかく夫君ハ宿かへ宿へしとし 花 箋
それ日はきさらいの女 秘 明石中宮のある 六条よあはれなる
二日めは事なり 花
おほくハおもるましきて宿ひよなり
中納言君さそひきこえて 箋 久我は薫も給さそひし 同車
して出ゆくて 秘 久我し 弄 箋
こよひのきしれ 河 白女嫁娶せる
秘 二十ヶ夜の箋し 弄 箋
此君てんかりへしられと 薫をとし年ありてこそへなりしてあるを
なり女かへらしとある
秘 薫にしけ六条ハあるよ薫へかしはのしかしめくらしはへおはしまへはなかれは
白女ふ宮り治へたしとハうちおもしく心よ人のるへまいとうか
りとハ枕給の徳とれ心得しりてしかるへ
るか宿とめよ 久我はいしさ宿し
人のくへかへかして 箋 薫の六条院白女はあるへかりけて

様ゝしとも云くれハそれなりてちくの儀式なとことゝり給へ

おとゝハ人もまれなりけむし　秘 夕霧ハいへりてくく云なり

箋 葵の上よりむねと夕霧ハ様ゝしと云也

よひとゝもに御かたにおりし給ひしかり　夕霧の芳へ白の君をよひ給

箋 式部卿王紀乃御方よりもまへり花嫁に御心もてより後に成そ

りち井まいらせ給へり

花 三日の夜の餅ハ婚礼にあり御なり　秘 三日夜のもちゐまいらする事みち

かくしかねつし　秘 菓子也なり

箋 若葉ふるき事をてしたなり

とうみて出かりけれ

もそし酒宴なるへきこ方へハおなしく出ゆへし　花箋　秘 白丁ハ六君の方におりしもしてかれ

箋 あされとハらしうちておりくしきこしつれとし

小の方の供なりかしの簾中高坏宰相

ゆらして出まゐる御さ也　花 白丁れ在人へ出なさて　秘 とき井なのりたて　花箋

わたし供中ねちりさしけく　花 宣旨ちく出さるへし

箋 白丁のへまりしひ色してなり使の人へ六君して一緒し

式部卿王の左少将伊予勤之

中納言のいくしとめ給つるに　葵の上へたつく酒饌なと給し

よろつきたるとも　あふ云りしあり桃くハたうしあり

まつて代葵の上もなひし来りゆくしまる人へありかお

かりて御年して給へり 箋

されとてらちやうかくいしまゐや

花 葵のかしらの御祈にし給へなり　秘 葵のさ給し 箋

東乃あひハ出るのひさく也らさのくつり事やしますよ　一秘 葵の出給て 花

箋 供奉の人と夜ふく蒼庭し給し　箋 李夕ハ宮紀にハ十人丸

おかしなる夜上人廿ハしおかりる

よ人々して供奉とし式供奉の人廿人なり

に従ひ人左女のちうそくにてなりそうて

箋 こゝわハよのつよの女のてうれそくし細きハらしま人への尤稿し

大臣十人ハしへさるよれつこされ若葉のらうしも皆まちめるへし

秘 二宮つさせハ六君のさねれに仲信なし　円

箋 あかひとくる寺し　葵のうしもさねにかくりて探しとあへなし 箋

義
唐衣ハきて裳をきて
先 同しくしかのよかうの事し當のとうしの手本ちかハいつやうなる
へきよし一疊茵衣の色ていろしふかき織物をもつくこおり平絹
の次しおりふきちめるとしいへり
六位には人をあやれわきてあらくへ由なし
りのしつ志さ由なし　秘 法令はわかハ色へき事もなけしさ由　義 織物位定し後ハ次し
と挑しめて
先しつらふねりたちとの　秘 説の召使し就主家へつかうして
めしつかひあまたるへしと称わハ厩の舎人なり
花 西宮故院宮雜使中御随身勤夜行召継奏時云々
今案就主家有召継式部卿重明親王嫁娶之時召継以下錢
二万と禄とあふら彼記にみえしらり白衣の此事も見よ
あるへし又私云此孫閣之御猶子らて召継と其をし
事もみえしこと称りとハ御厩の舎人し
義 召家小わりと見しとこし院就見と召つるよ故家以下見候書ハ
私秘ノ義諸書によりて花鳥よみりしてあるさ化ありて其義ハの說

ぶれなくりしくハえてそぐん人あめくさりける
物語乃纒にれ此清しはそひの事よくしきとりよろり
私云これとこよりり等なし
李部王記天暦二年十一月廿二日丁卯秉諸右兼相坊門家
娶乙中女丈に目夜更衛深向右相府亭所之東南對廂東頭
西向設座以朱臺六臺及銀器弁饌少臺一双様器弁饌菓子
等安座右其西北對設客座主乙傳侍女告汝饌由郎也就座兵
衛督師尹卿右衛門督師氏朝臣相次加座以折敷饌左少将
藤原朝臣伊尹以盡酒安臺酒巡両三行郎入簾中侍女以一
盃餅安莒蓋差之公主宰客卿起就別處而飲深賜陪従若禄
五位三人白單細長各二領袴一具六位有官散位四人各同
細長二領無官三位有官散位四人各同細長二領無官三人
白絹各一匹召継以下錢二万　今案女裝束ハ常は裳唐衣本
也細長ハ其女ハ其之衣也ものをとをもりし二さまもきて唐衣ハ
中陪をとこゝや様よ小袿し或白或地摺或村濃等有若失し
中納言殿の御ぎんのあつふ　秘 物語乃訛諸よくきつり

ぬりてうちなびけさく
花 薫乃御ゆり給ふに用しく御らし
箋 薫乃宮まうでたまへるとし
箋 見しよりかれにひしこその宿れる哉
秋の御やすむ所にしるへり
つきりみなみ地し
秘 薫二条院に御ゆりまいり 箋
見ハ入くるし給て
花 薫の二条院にゆりてれるとし二条院よりかへり給へる事ハいまうて
見れとたなり
む くりるれゆり給てこと秋の儀式をくりおかりひまに来し
くらぬめけなる
箋 何とも知てあらぬ経耕へとしさる御白院の
さ夜よくりそてなり給へるとらてし
くまとありるひ
花 夕言方れ方まて舞殿の庭の耕れるり
まふりれそてうしておりつる女子
秘 薫にも女子れ持つらハ式白にしそて年とめとし 箋
内にやふえまりいせさりもり
花 白ふしとて上りぬ内裏なとにて新
さんうとこりし也
なめおりんとくさし給へるむとめハ源中納言よしそかし

花 白家にしくさし給へるにいひみち薫のしそかしこんてあり
秘 白家にもおりもとちらしこ代にかし
とるらえさうる御むとおもしくおこらりせりれ
秘 かうあ代ハ早たしもかし 花
うちれ江家しきこゆる
女二宮の御るし 箋
ありにいとうく似あつゝん時に
秘 宇治大家し
箋 あえてしき文字清たしり
箋 薫のへて
わせられえしてへりるこ
花 くわるれ心に人分り
女二家にさうつ姫んへし
みくおんれうつてあり
抄家 うらいつしよにゆまし
おとこせき川とみたれ物へん名とておかくれし
河 関川 賀茂川 寛平菊合り 河り
秘 わせられえ乃このし人めくへうるやうに秋のへいそさ給ひつるを
ゆるしたるれとハよありかくりり給ふへきるまてハなしとし哀男
教すりね花たり夕へしとうちいうしハ大てこおとり心てせき川ハ逢坂
の関の小川とらくいわりとなまと物へんハえ訓よるし名訓にかせてあり 花箋

ゆるし
花つえなりくの御川みつをせかりえ良のみこの命なり
ゆるしらんへたえゆれんと関川の下のゆらむひたえもゆるよみのゆるし
むね 流しそしてうへハつんゆゆると実川乃岸にあゆるし心ハありしとみてありよ
秘 蒙もの与えし　蒙 流しもゆるとも心をさへゆうてしたの流ハ添ゆる詐とし
ゆうし也もなうんなそそれ　秘 命とうとうりそ葉のつゆ地にさり
まよまハ此ありしう流へ　秘 蒙もの用し
蒙 秋深く秋の夜の承なり
むとおくしさてよの儀と流くさねし
私 人ハ情しえくえうんなりう平安ゆらみまうし流くさんとし　秘 蒙ものつるといへり
流りまるも自然のよ夜の色く秋ゆるやんりやうにわりおりさうゆふ
あひきうひあふて情なくハあらてあくまなりや　蒙 白文まだふおくゆと
あれらふ世のそむこと流つるうえの比うこ
花 女三ニ文の比うこふ女よりしてまかへしなり
秘 蒙花よあなうらふ女三ニ文の比うこふ何との人々といへり　蒙
文に女三くの比うこ見しゆえ中の流をふ　秘 白文始て六二えうん居し　蒙
私 五えんすへハゆるあれ未しとこれ

おほしこさうへしなりる　見しより六条院のさ御なりそくられ給ひし
うち廿一二てみえしより　蒙 こゝかしこに不足なる所なき様とし
かこなりにかゝる流あるく　蒙 久しう我自情を好なり
立ふにおやうそハんとまうり　見しより中宮のみ御に
ゆ人のおもやれんとを庭にあらねてみとふへふまことひめつるか
あひきやうつくらうしめし来に
多いの御かるこハ　秘 中宮なり
わ宮にいらへなと　花 六条院のうす　蒙
うれしし家なり　花 六条院一かしてあしくとも心えとはめうそ
ともいかうりきさるハめうれく　蒙 浩蕩ゆし英麗と流く色るハ
白文の比同あれかをとなり
いろぬまくこれとそしあつる
むね そうしハ殺しあのゝふてしなそ色に簡略あるといふなり　好殺也
秘 そしし ハ殺し好しもしつる稀なるに花鳥説筧勇吉といへり　蒙
私 好のゆかしと好みて心にのゆ来ゆくまさ竹ちとあのうそしとて
三条夜りくゆ大将宮　秘 雲の鳥居のうち　花

私 左大臣の女御御まいりあるへし
大臣はおはし　白氏とりてたゝしの人なとし　箋 白氏は大臣の六条院に似たりとおもひて
二条院にかりえんやなと
中宮へまいらしきとし
前はそのよそしたゝかしやうに　花 六条院の前はかりかり白氏
のとし給ふとおほしゝと　六くて六条院に給ふなと花
箋 是は大臣と云給ふとおほし　とて白氏もとし給ふとおもひしゝとし
くらんとあるこゝろは　秘 中宮の心し不肖なとし
箋 中宮の心なり
いとくやは右大臣のなうへの　白氏の給ひなる右大臣のことなとし
いりなてあほしを　箋 給ふとのちくし宮給ふをおもしなとし
なかいりてあひくいつかるれ　箋 中宮うち給へのことし
めく宮にふりてなくしなとせいして
大臣へあるめく宮のあるきし御とらしこうしとも也
一日はとゝかざりけるつら人あらし　秘 父の御八宮は第二度給ふ
もうかるはいうしくくおほひし事し　本箋

私 給ふにはまた後給ふ大臣のの中　中宮への中　あるなか
うけ御心の内おほりなうろもしらは　花 箋心の内にはか大臣と思し給
くそ右大臣に成たりくてこひおそくし中宮の御みに思ひけて
箋 是は箋心の八宮のある給ふ右大臣なとく思ひしあれて第二度は御事なと
これおもへるへきおほしをし給ふ給はれり　花鳥 説也
さりぬへき人はらうしも　秘 説くしてあつはまさかり給へとらうのまことし
花 さらぬへくは箋心にいそき給ひもせよとし　此義一説　一説に中宮は宮
給へるまゝりおかんとりなへてしらし
箋心のかりおもひてらうそいそき給へし紀なり日来あらしあること
私 秘 父宮の姫の義なし
大臣は御こゝ日記いのことくも　八宮の給ふは中給ふふあひかの人気
りかくこ海しとみるへしとし第一説なるへし
これなり思てまつる御心の内にいふに　箋 大臣のゐたるはかなさへて海
しく宮をのあるこゝりこ海くくみかてくものつらうしなからあるに
箋心の心とにめさうしてかへしとし
大臣はいまめしくこれをとめら給へる　秘 箋心のことし白は大臣の給ひそ

らうたくらうたけなるなりへし
おかしおこなりきみけれ　箋 白きは中宮へ緋色なるといへり怪しき
うけぬるけるね　秘 葉への色なるしきんへの色なるにハつくまし　花 色なるは朝葉への色なるを
一日ハ宮しつまりもいふことを夜ふかく
秘 文乃御召日のなると大将ふかし
花 左文の御召日ふ御衣の色なるとこれおほしてまつ御ひし事とらへて
ならてとことしそれて中宮への御為ふいつりと紀之御色の人の
右大臣とれうん御へてそのへの御為志し猶く名とりて見た葉の
弟れる事のこし茶し
思ひ給しさらに御つる御ら御なひのく
私 此紀事とは御法世ゆえのしゆさハ中宮の御へ紀のへらて
右のへさうして思ひ見ることしある宮の御へならむ給へらへさまつの
なるとれのひし承りとし
花 ふとうふに思ひとハさうにれおこしなるひしとさらひのふるやうに
今案宮の御へさうら給りんとしれのの紀たれハ不可説とらとふらんや
右大臣しれのりせるのそ　花 わりしれ右大臣しれの人ハ清く為とし

秘 おれの人の給への右大臣なりてもしらしとおわり
箋 中宮の羽を清くいへり中宮へ後ふ葉としてさくらの
右大臣てハ曲なりしとし　私 おふ小花宮に記されたる箋非説
うらりハさらのひく　箋 気りてゆさんとし
よくうれ　みかの実なり桂し
さてまうこれ日久つる祐し　箋 文乃みつし羽之日れ久し
いらしふかりしそへ給つる　箋 葉への色さらへしるハ給りおもろく
しきりとなりわ
丁子そめの扇乃　箋 扇ふ丁子の色なるけれるなりへし
秘 よめつとのふかりあわりしなるへし　花
母宮てあやしくゆらしのとし　秘 宮給まそれるとし
箋 そひのしるしのひし事し
さてあるものしをとしくのハ　箋 葉はよくしてれるとし
秘 草子は地し
うち外しきらへの給みさ夜　秘 白ふくしつまつへとし
御事しいらくこらあわりらるまつまし給ふかや

ちかくしとてうかれける雨の夜のりつゝ思しえたてまつりし

りよきえんきのうちに　花　むかしの宮へまいりきこえたまへし

紅葉おほふ□り侍へる時にうちの御方へまいらせ給へ

りさかしめしと侍りさりしと　秘　薫の御しつらひあへ

りしよの御方にまつることしきこえの后にはあつかりたまひし

まいりしかはゆるさせ給へる　箋　さりぬへくはかりのこるゆへ

あいなうせのみことうけたまはりしかは

秘　此うれ宮あまたうせ給へりとやのことし　花　箋

うしろの御まへしも御ゆかしくおほしめし給ふにや

りよきえんきの内にて対面しておほえける人よりまいりて奉る

なき御ことゝりし　秘　中宮の心くし　箋

箋　うしろたてうしろは宇治への事といひしんあるなか

一日うまらしくゆめ給し　秘　中宮の御

箋　宇治にて宮の御方の后日に給ひし又やよと行宮参りの事へまいらぬ

すそ院のわたしくらふにあくはかりへさてまいらせて参る

中宮かうしし花宮の院にいりて侍らし

む　薫は薫の宇治の山里をおもしろしうた思しゆかりのあつかへ

なよの御かへし来るとし　秘

いくしさまとかく　退　ヒリソキし　薫中の奥深さうしたまひ　箋

いとまさしと給ひるれ　箋　薫の御心さしておはしかるし

秘　薫の御あまりにおしかりたなるし

まいやうふさこしてさせうけあきつしまりしき

箋　東にこゝへやうふかくあさき事もなし

きかくかりして　中宮の心し

あかしかつかはし　かるれくし

宮の御心くへあいりにに　秘　白の六條院にひゝかり給ふとし

りいはひもとより　箋　白の中をとらしていひさけなきれくし

中宮の薫の御心くし御気色

あく世やうさなうやうに　花　川余同　箋

秘　世やいうさくへやいつくなる御かるのうに思ひしれ逢ひしたき

おゝくなかとし川きの世やいうさくへやいつくあ

山里にあつしさ御に　秘　薫へわたまへるし

みなしもん花とも付は　秘　菊の節会の中より始りとし
一流宗匠しきにまかせ候へく　箋　白菊へ同しくその御心
次第にて御さへ事になりけり　箋　六花のうちに何もさしたる
たひ先かつらくものうつしても
屋うつなりし事やうにいつくしきなりけり　箋　菊の花なりぬハ白菊も初而（時）
ひ流やとくへきぬ　花　もり入もの川なし
梅にもうめやうし　箋　川名月
何かり入ても梅にもうつや世中とあるしかりて気月とみらん
秘　菊のみ中にふ見るにもしたまれハあまりてひはさあれは出来ぬると
かれめしつ　箋　菊のこゝに風流ならし
いとよきさくあるへく　中見のこゝて
さらハ花もたちやましく　秘　中見花頼し
何くもりつゝるの思ひなちて　へきふう　秘　川しゆめんあらしとまたく有るへう
いちしまて仕りし　箋　石の花ハ皆活れ候し
志けし何合く　秘　中見し九月にとし
花いぬらぬかし　箋　九月上旬し

なかなか世の中しなくともしらて　箋　白へ　にふ及ぬと
秘　白もけしからましきことなるへし　様なるみなりとよき
あかれらは何なりり　箋　大見何こる出れなり
むしあり出で候　箋　中見のくされハしてとし
女さりやあるまくや　川入の頃つさく菊ても有り蘆中へて
それはつさく　花　あしらやハれのはのふハあり
あちらやらのひくハあるへく
なやのくてもひくしそうしめて宗活への菓とれあるを
そらあまつてあしねさらふかうりなしてもらくなそひきて
りや仕しんもうてらそうけぬまうりきしあんとこつけく
秘　あんちのちへいり仕るし
ならの中見の頼に宗活への菓何思いても思ひくしそのうち
なかなか世の梅あちても出らくしやしれなりしといへり
花　中見乃宗活へも思ひくるへしと仕りしを菊のうち
何らく思ひくと云詞にたらり何て
箋　前の菊くもにあてり

うしろ見し人へきこゆめてあつかひさま
前そそひめしたる（事也）ハ又いつり
いへをんへきん花もきん　中宮の也
ある程なりける　秘 中宮の御詞
そらしハことりなれハ　ある御詞
いかへてとおほしいてらし　箋 むかしそひめしの
之紀の事なり
ゐみし人の御ゆるしし　秘 大宮也
月のかくやしと　葵の事とりひしくるし
ちんるかいらしとも人のつゆなり　中宮の也
かくしむ宮ふんむちさせん　秘 中宮の也
こハなそのあるうらし　ある御詞
いひもれいらんあけふくるき　中宮の御心し葵の也
思へ分しもらも　箋 むかしれそひめしの御時の事
くやしきみにも思ふ給そあはれなる　箋 二条院秘昔門らるし
御なるをハ人のとうめつつしれ物しきみにも思ふ給ハあはれなり

風ふきあれぬるそいとおしきや　らくさのひし女房二人也
あらそれあらしさ　れハ中宮の御為いとおしきこと
むかしふかきことかりし　箋 前のそひめしふさへ事なり
しハよりて葵の御ためしあかし
くやしれそこと御ゆめて　秘 第子也なり
おかしくへきやうなうしとおもひせくあかして第の也し
かひなれれうへめの御いなれと　秘 葵の事清なるさ御し
箋 はいれある所あるれ妙し
なやましけにきこえさか　懐妊は今夜葵の御なやみて
いとうしとおもひよりつるなしれたる　秘 懐妊は常し　箋
花 懐妊の女の事又は常の事し
くやしくもあるさへ　箋 うちゆくよるけれはやみある（おうきき）
さらしくなうは　浅ふ葵のまうく飛川らしらめ也
せう秘て今はなうてさまし　ことさ　箋 さらしくなるものかまかせ
まうれなしきさなり
すこしかなやさ　中宮の御ゆ也

ゐなか人のことよしと見へし八月にそひける
箋 あるしけたゝしハ浪にかへりかへり見ハめつらしくしてやまさきか
守済ふいしこうつ海りしけに
中将守済へ御海りしうし　済へ来たらわ
箋 かやうに中将へ行るれハうつくしき海にてなれ来と云ひあて
中将の御合を済へり
まこいとふることあし　ゐふハなきた　箋 菫しり中将へあり
菫 いとつらふりけり宿の露なけしむつし　あれめて秋のそくらか
秘 むかしもやうの事ハ見つしとせ
箋 昔みたひめつしとおりひ出るなわ
ことりとへぬつきこれしたらん　花 九月　箋 九月の月
抄 長月ともしハうつらぬ梅とをそとかてとりとへぬ使まなん
うけぬまうりぬ　秘 雉来たり
わもりことをくおつ侍ハたつし　ゆりるれんて
をこうし世中ともまう　箋 中将れさ御とおりひつくる菫めて
いかへよハいとおかし御さりて　箋 ゆりるれむし　そひめし

の時けりあつひらつめるたまり
ひまうれるそ済ひなとし　白雉れ中そしくまとあり
わけまこくやうなれさ御ふハ　箋 うれとあれりしへふむかたゝ
とをおりてむこしゆへハえあつしとうて
さうりくうけよ　秘 梅の枝し
なれ人のゆうかりうた　箋 太政の事し
これハあつえてつかうまつられあるたる
箋 太政の事ハ太政と云つまぬわりれ侍りし見ハ様しのる仙
わるのしてるふ云ひ化くてさ御しとし菫のつ
まうより世済ひぬてし　箋 白雉中将へおりしうつとし
うしほしれ侍りそせて　菫の中将とうしつとろうれ人
またハおつてとりしきもうふ白雉れおりしうる済うつやまのつくう云
済ハくうそてのうさ御めて　秘 中将へ白雉と八根と済ハさるし
ゐれりしへるうへまゑきも　箋 うりるれるし
きしをゐ市とハあすうふまうせて　済うれあつし済をぬ梅ハ月ありけ
うやまう此ハ人のはハうか

箋 川前因縁のかりそめなる事也是はかくハ源氏の心に白氏文集
多くはえんとし　白氏文集の心也
いとあはれなるおもひしく
箋 中宮の御心にもはかなきこの世をいとはせ給ふへき事の一段あはれしくきこえたるとし
られたる御心よりはかなき世の常　秘 菩提の心をもたせ給ふへし
見えつゝしくさへ　箋 白氏文集の懐旧の心也
ものうけれ也　秘 六道の心をいふ　箋
くれなゐにかれとこやあはれと　中宮の心也
秘 おもとこハいつまてか年経たるに待すへし　弁 箋
わかれたりつる人の　秘 かゝるなる也
年比の菩提とあはれたるへしといふ人相をたのもし
このもとハわかれのしきこともとおもふハ此白氏文集にしるしたるを
今はかれその御むへきこともふ年のほとの御事也
これはゆゝしきなるへし　返ゝハかなきよはハ白氏文集
こその御むへきれしとなり　孟
多くゆかしくもありきこえしかりし　菩提の心への心也

中宮の御心もむかしハ唯何となくやうなるへし
むかしの人のよしともてたまへし　箋 大宮の御実母なり
久しくこゝら所々に来ハ
箋 白氏文集にかゝり八葉の人の名川なるとて　ふかき也
かへりみとをるまゝ所をやうやう中宮のしのむかし
かれ人のうつり香　かゝるは後事也
そのかれ人にし　箋 其の心にかなひたる白氏文集にいひし
又此文の心のつまとなるへし
いとかくしもありしも為也　中宮の御事なり
されハかかれさるとは　箋 白氏文集也
さて人中将の御心ともねたきにかよひしと
箋 此文とハねたき人のうちも身のむしきかなかり
のちりかりてしてあくしと　白氏のありてとりて
かくして身をあはれにありたれ　秘 中宮の心也
かくきこえ給ふ御心しなる程を　箋 さ御こゝろ給へる文にて云給
へとこゝ御文ハ思ひし此中宮の御心へかくりてこなさ御心にこゝの為なし

秘 東宮にて立后のち御代には立后の事もをこなはるへきなるへし
弄 さなきたにはかなくやうにあまたなきにより侍りつるものなるへし
これにてさなきたにやうやうかくてもくきりてもにとてあきと
花宿 今これハあはれにてさなきに言葉もいまたなかりしをも侍る女はん
と葉中云のあはれハ云ふことよりさなきにもへらるゝ御名に次第とて
なかさるくしとうちつてもさる侍るへき事なし
弄 川海同せあれ人のやうにかくてこそ事し見えなくしうとうきりてもにとて事
うるあはれ中にとかくてさやうにうるゝしき事ハあるへしとことし
秘 川海同かしてさなきに言葉もあはしうとうさいハなるへしさらへしうやう
乃御中にてしハあはれにかくしき事とし
同 葉之立后のあはれたるの方ハえぬへしといへ中にてとりつ事は別し
あさるし給ふとき中云あはれたる月さらにへもへられける物とあはとつ
あつかりハあはれなるとしてかるへきなれ 小字とつく
箋 花鳥の義又秘の小云の義あつかり川海同し 秘にて見えてハみて
なうしうこのへあるハされしてえてよ 言事なるへきなるへし よりへ侍
事をとしけしてく白のあるへるそてたる事ハ侍事たらん白文

とれむかしきこしあはれにしてくるや葉にかくて事まつれと葉のる
かくしつけらくらし侍りて白文の六らちへつあらしかなしてえよ
言事ありて葉へ事事侍るまえとのの事し 私箋義之同之
又御心あはれなるへつりの
いへあつかあさへいと称らして 秘 いくらくの乗られかてあつさる物とし
いくんくこあつてあくしきるし 白の称しましくあられとし中云ハ
白文 又人のしたくれある袖のつりまもとあはり月かさ思くうくみたるる
箋 事ありて袖とかかるく絶態して事し一旦のるよかいあつかりや
あつくうらむるくにさき中云の言よくを侍りて時あるハ不可及の
いつかへさ方もあくれとこあるかうれしてあかなれハつく
いくハとて
の女あつみたなり
白文 うかれぬる中の袖とも女かうしをくえりかくやうけくうれたらん
えうれあるはちれつとしうりハくえうりしそれにと振あるならら
弄 うくうりハ女子あよきへさなり
秘 うつりとかつりはくえかりとし時あつしてまもに大殿のみひとたつ侍り箋
箋 うれさき時来代ことつけく義後のへきことなり

これなくてうしと
きゝてかろく也
これとおかれたり
みあしれれんなりや　秘やうれ所に萩の心ばへ色こきとし白の心
りはらしらへ　白れ中宮御文とあり御かりさんなあ
まゐれ月てんのてうふ　箋萩の花の評也
此事りいなるてさうけうやく　白れ心こうし中宮とひらし心へまて
秘六条院のたゝこれ光君うつ　白れ御ゆり給て野分のさ波し
なへえうるうちものしつ也　めとなり箋
たまかへ出へきさあし　箋萩ハ萩によりきれてありけ給へて
秘たりおくつなるうたみをも　日こてハ暁うしつれ夜もよくあるなり
なふつるもいとう侍りし　箋紅葉賀いつまもかくしなり
秘六条院ハ中宮へもてなしのくゝハおのうなるし　花
さうなる人のたゝもそひ　秘六条院本白家れ人ぐさしらうあるうちへのかくに所うありとし
えちうれたりけり　箋六条院の本し
むくうしくしたうきこゝし
箋むさしれうれ夜ゆらくつれあきらうてとおりけり
まいようらしく　箋中宮の御しあかてやきよきさきとお
り御中うりまいなくとれいちちるうつねおりさうふ
箋白れ心と我お中宮へ萩の心みくもあしくと萩つくふ
らつく光君てゆへらこうつきこゝみかとのあるかしさう仰まて
心はまへいもこて女花とし光ハ我おれる所いつりまゐよりのしらり
あいきやうつさらさら花所　光ハ中宮のさ波れ云
これとりうるかしふハわらわん人の家らくいひうよく
秘此後たりとなるわへさ　あかれちうつさようなハらうれたるもり
き中宮の御さ波ありとし也
らうれみ侍しこうきとり　花御厨子　小唐櫃
いとうれたハあし
萩てし中宮よりそくみてれとハあしくし白れおかれたり
られ人の家あしきて　秘りうるれ本し箋
その月もえいかく侍りれ　心りとかって代二条院にむかへるなり
六条院にハ所々とて二てうとひ　秘六条院の所うこし

いりのかたにふつる御てらの鐘のこゑとつゝきてきこへてあはれ
箋 中将は官女の六条へ行て女のこゝろをためしに行たるなり
こよりおりしまし　箋 白の二条院にかへりける事と草子のくわり
なとせん稀にまうしたるのみありしたなり
なかくものおこり侍しくわしきそうし　草子のかゝるへきにくちおし
うし侍やともしとふかきそめ　箋 中将は花のやうにしてふかくへの
かやれくるまにうつしつれまきてとふりへもたなり
さハいひてしえあかりしきてさふめり　秘 草子のつゝけはくはなはふかく
ともに中将はちかくありてけるハうつりしきつとし　箋
くわれ雲くはなるの　秘 中将まさりのみしへ人とふる風情つゝて　箋
うへまれはくもら　わかるれ女ニ定めなり
まいのとうん月のわりしのおもふに　女ニ定の月
奥 草子のそのきくらて八講なとをぬきまひし事をおこさやうの
清書とは九月なれはつねのへきるしとみえたり
秘 九月を無月なれば清書なるへし
箋 大将は清書と也　私案 ノ箋 大将は荒月にまかせ

まつりとしこの説ハ例の無ん月の清書なりとあれとハ西より九
月なりとも行記の清書なるや
なふてしくゐたき　草子の前しまさして深なるとおもふへつれいとあはれ
いたれはくしまてとき給めてれおもふ所し
あくかるこね　いまうし後あはれなるへし
うつる御まへてしおくるべききはなかりにひとたる
秘 中将のけしき
箋 中将の御気色ハ草子の有まゝにてなりゆきて
くそしれきハかるかりなる　かるれきもつれきわかれはく女のくもの
のきいなかりしとあり　ひりつかれ中し
うしれきいけわたる
草 むもひける契りてしおけるとももも一もとらすらやハもとなか
秘 保の常なとどえるかるへ来しおほハ契りあらんおりまなる
来しと世なかよしおもひかへきまて事をもたちたるとし
箋 とうし一もとらしとハ保の一けるといつり下のこゝを契りてとあるハ
草子のこゝろわまくしらるへき事ともくへゆつりしもくついてとし

されハ家の名からの事なれハ中宮へと一さらに恨むへう侍てなりとし
おもひ侍し
大輔の君とて　宇治より京へ出し時なからし人への
うりあしね夜の　義 菩ひより此のひにかゝれ夜なりけさせし
の月をこなしねて法海なしぬとなり
御もうすれハ　義 中将君乃抄なり
ねらんとさせ給て　白氏おもふう君にも中宮へとせ給ふぬハて
君の事にくめなしにかくれハ
義 菩ひよりやうれハつひ細し此事そとなり
人てふうりちらしなとそられハ
大輔此君乃中宮へてさせ給はれ人てかうちらつられなり
とのくさうしぬハ　義 ぬえむてありとおかみてありけり
おもへちらくつらう御りなかしとて
義 おもうへなさこハ菩つもねらんまへこさおまつくうみてなり
きらうんなしぬて　揚焉ケチエン イチシルシトヨムナリ
すこしきなあひなしぬらんとなり

御事とも申し侍しやんゆ　花 中将君と張ふしおらんとし
義 中将君乃此ゆゑりぬへきこへ菩ひなりてハたりしとなり
家ハおとろなり給此くさし　義 白氏文集中将君と恩切なりし
給へもこ御なの事とハえそり給ひぬとしりとし
ゑんよそく給さもし　花の露なり
菩ひの事と派説とく　義 白氏文なるし
おほもへの女めなれハ　義 白氏くすハ風流なりなりとし
一段よこまやかなるとさつぬへてハ行不足ふ云ふぬへし　義 草生此御ぬつひよりハ中君へ与
花 中将君とこひのかへたり
秘 白氏文ハ中将君と一段とこ君ふうりてそられけてかくくて見給つ
いくやなとそしらりきに　花 ことわりもしぬ給めのかとハ文の
ねうしろこれらとおろかなるやうふそし　つまり給し
秘 不足ふれと先のしなとハ申たりしとなり
まうりへなとれなりけさやうなしね　是ハ無分文の行とふ白文
こ夜の御事なとハえ知り給ひぬ石にそのさうつぬ人なとうらわるね
事なるとふさしなとまそしゝてみりてもみりつ書し文にふくる

まろひに似合はしく中君はくるしからぬ本ありしとなり
すてとのはは世にむつきしは　大君のはなくして　箋
中君をはゝはよく見たれはなん人なりともいつくしくくしくて
らんとおもひしをおほえたり
うれしくおもひかゝえんくるしくもてなしゆくへき
薫は中君の心地しくるしさてやりぬるにしき事は論なし
御こゝろよりは心まかせの事もあさましき事はあるまじきをおもひて
くちをしきあやしきは此人の身にたくみんとおもふ人やあらん
うの用様なりとし
いまはそれもいふめやかは花さ給ふか　秘 前には心うくあはれなる物ともなれはとは
えしはしらしさまてまえし世給へり
わやしつ　河 後料　条の事なり
秘 後をしらへき料なりや　もしは定ちんけるし
このみもてまかもかくりけるし給ふれ　花 薫のこと　秘
箋 白にかくれの栄耀の人なり
はえと御山庄とは　八宮の宇治の山里に隠しくさひたまふ

と薫は兄なり心ひ給ふかくかならずやりの深きこと
いとをしれ人なりけりや上様　花 宇治の宮のありさま心しき様
給へなりひくおしくその給ひて人の為にいとはしとし
秘 花 尼君になつかしれなく人の言をしくてかゝる事よりて知給ふ
秘 草子の乱しうくとるもの世の中の事とし
箋 紙心は評し　紅やうに言をしく心にひしこの事になる
りてみ給へ八宮といてとおもしきこえ給ひて
くてはいてらし給やはく　花となくして　薫の心ひあし
なかまし中君よ心のうち事かくていさくやとおもふなり
秘 薫の心なり
ひとへにもちはへなりは　秘 中君の心し思ひそんしかやになり
さ給ふとなる事のありし人　さ給ふとなるとは薫は中君をえ
身たちのやうなるものゆかりのめでわすれぬまは涙の思ひてし
なくておしかりひとる人なれはさ給ふとなるといふなり
あはれとそこぬみには
薫のあはれなる心のかたとをさへおもへきとし

いふひありかへしきやうかうハうなあはらし　花 新宗れ人とりこし
花うしめくねよる人なりしふハ中宮の人おほくあつかひし
秘 後彰宗の人とかくし 箋
えなれなるとてハこの山里れ　孝 あるる人かうく人をうしねなり
ひうけるなれくいふうひうれ姉ここにちとをとし
おりせしはこの人くもうか
箋 大臣れおりせし薨れ中宮へ〳〵けしとせ
この事いとくるしとおもりも　箋 白宮の人のかいるよりも薨
の人けののつくるしきこし中宮の人て
おしこ宮てをかくうらしく　秘 かかるなり
在せてらしハ后宮とね　わさ御よあひとかりんぬれりやうて
薗とりくれなり　箋 薩かなり
あらこれあらぬへきに　箋 かかるれくなり
なやませ僧よおりハさしぬ僧都とも
秘 薨の羽縁師僧都の執なり
箋 僧の事 加持なとの時なる

祀の宗しこ　ちゝしかりしとうしへしれいふなり
乗ねれそうのうふ　秘 加持する人と秘后の僧といふ
秘 加持の僧
箋 母やれかわさうしたうさへし
人のくいはや宮ちう宮ちうえんなりうれて
箋 宮ちうえんハ楊馬しいちうすく人の不書れあ円へ〳〵んそくて
射面しほあかり　秘 中宮の人誅秘し
ここくしあのほ人宮とくひ　薨の心し中宮れ宮くとひなり
むしれ人のなやまとてあ得へりし
大臣れ事の此むらすとゆくしくてらあり
なれくし宮ふらへけきうり　箋 一の付れとくし
いとくうしくれハわりなうしとて　中宮のくて
かねとりひし人と　箋 女御とそくたさうつりせなて
むよハあさんへきうハくうし　箋 なふもおしうなへここ事なれとも
人とくらへおりんぬあ薨の羽なり
ぬらほりほり宮くとまふそうらやそうぬ

河 手習ハ下やもうしぬへくよふハあさらりれ給ふもちかくさふらひ給ふ
花 下屋もうしぬハ中宮の御ことなり
秘 中宮の御ことなり 箋 いふ義あり 花もし
弘徽殿もうしぬハ箋の御ことてこゝ混し給ふ不及引出し
いふれハかくしもつゝのふ 秘 箋の御こと
人よとひ給ひつハ 秘 懐妊したる人の顔色弱らへし
箋 御こそるゝしられ後ハさてなれといひしとし
いとくいりしくく 秘 懐妊のゝ給たち給ふて 花
むねハいりもなくかくしてそハ御さもむつしれ人て
秘 あくしれ人ことハ大宮て 中宮の御事
あらるきまふきゝ人のもるゝさとら 箋 大宮して胸ふや給ふし
長気なる御しきゝ人のくみて人のいひしとし
まふあれてみな御覧れ声あらぬ 花 引出こても世の―
河 こうても世のちゝよふなつあへかそれしてもせの声あらなくふ
秘 引出間 箋 引出間し妙なる叶たゝ
然ふせゐる人のきこえんしてまられそ 秘 かわあり

花 御くまれあひら中宮ゝゝりれよ給ひのやうふふ言ひし
のねらく気ひよ引よハ 箋 中宮ハ給つへ様よりひたう給ひて
言ふたちよ給ひ御ことへありし
箋 中将ゝゝよハいひ今給なうしてゝりありふなり
右君の御事と 箋 大宮なり
いくけありし様なり世中とふつえ文て
箋 くるれふいりもつれてくわり
られ給ひらおゐゝあらん 秘 大宮よらけそめし事し 秘 箋への御
箋 二条うゝ給ひらしとみてと父宮の安く継古年又下に混し
右被見合 延喜 年こしきしも河二条ありら六条年ゝ注之
くれとしつゝへたらぬひやしふらん
大宮よらけしうり出給ゝろあるのくりやみしうるとし
なくさあへりふこうてつしこゝて 大宮の言ひてゝ黄なうさあし
さうふかゝさ御よハ
大宮の御事し斜さ御といつるふく中宮めふてゐへしとし
心のもくこれつなしぬさしありられハ 大宮のこゝろもち

あはれに御ゆき様に中宮の宮にても
よの人に似ぬさまなと　箋 薫の実法なるゆへ
うらなくたのみの給ふ　花 なをしけつゝひさと云詞つゝひし
うしろめたくおほしきこえて　秘 中宮の御こゝろをはかりて也
とかく念しわたりつゝも
箋 大かたの人にてハ薫のおはせんハくちをしかるへきことし
みつからの御ゆかりしのひしハ
箋 薫の実法なるかうしろ深切なるゆへなり
今ハこれなりたるとおもふらし
ちとせりしもすゑもおもふさまにあつかひきこえ給へきなとし
さやうなるおりしも御後見のとりつくしきに
秘 薫の御中宮のまへより薫にもおほしかけて御まもりとし
これの後見也　花
さやうなれよしといふ事也しかありけるを　御後見とおもふし
此宇治山里いとくおそいそさふらうして
む 宇治の古事とハ後の世の為になとゆへりあるへきと云

むかし薫大将のかゝる男とかおとなしく　箋 若君御らんしてこそ
かのあかし御なされとはからんしてこそ
秘 此箋かゆ
箋 宇治への御出ありて御わすれいなと
秘 かゝうしてとハそれも山里への御ゆかりなれハにて
御らんしあつかひて
箋 それもやうやうに若君わたりしておはしまけれハとて　秘 それかやうに嬉しく
山のことくして
花 二条院の庭はつきやましとも　花の御ものゆへなり　秘 花 箋
かさりなきにきなとし
河 色々のかさりにきせをかせてのゆへに
秘 川舟 河に同 宇治は山里なる所にもなけれハ
箋 川舟同此事は此の句つゝきを給ふなるなり
いんとはつけら我れあまにかくよあり

うれしさとれるさうりに　秘 宗治なり
義 宗治れ来しさまに流書なりしれ里しとらはなりしあるし
むしあはれなる人へとこそたえり給ふとりにしとめく
秘 大君の御来し 義　花 女義わり見ゆ海に一義なり 一云ある
むしれ人のそりめとりめて
河 白氏文集云香炉峰化有寺号遺愛寺伴寺高宗皇帝有寂
愛王子至七歳忽薨不堪哀傷建立堂舎王子形安置其寺草
堂記　畫圖支漢武帝初喪李夫人甘泉殿裏令写真丹青
畫出竟何益不言不笑愁殺君 白氏文集　彫刻支武帝以薫中
君李夫人形作以温石　秘 中君ノ心し　私中君ノ詞し
あくれなる御禄ひとに
義 中君の返答なり
みるそてかくさし川ちかれに流るるへくもとそて
河 ゑきうしとみくらし河ふせし 御綾袮はけるもあり ふたるる
秘 人形とはつまふつさとくいひり ゑをしなりとりて来は紙の名まは
まさこと来としし 川角日河に

花 背あかりある人へことそりしれかへりたつさくかんてあそ川の人形を
なるよせく思ひれはそらしこ来もあまし ゑをしこともなるか
まなるひとおしく物なきとれのなたり
花 ゑきうしれるを給ひもくさきようこれ来なりけれはおふなる人に似あらぬ
ゑし川角同　私花鳥の義なり　以上花
義 御綾乃人へるかやてゑつるれしさやうまて大君の人形へとおもひとし 川角
こゝまとしむる絵し ゑてそたとらしろめくしくれ くれくし
秘 昭君とこくあしくうちるりしてりとし
花 昭君とこくうれ人へつる来 あまりて
義 昭君ハ美人乃りまふかりて畫工何かとも形ともつらかへさしれて似
たハ曲ともかし又為し かたちかさんもいくかれはうくろかしとこも
河 蒼鮃云漢元帝宮人頗多常令畫工圖之有欲呼者彼圖以召
故宮人多行賂於畫工王昭君姿容甚麗無所苟求工遂點其
形後匈奴求美女帝以昭君充行既召見帝悅之而名字已去
遂不復留帝怒殺畫工毛延壽　杜詩注
みまれるの少くろゝもゑしくいなてハ人ふまかりの人な

秘　不言不笑ことはゝひなうらみへしとし
　くいつきし中宮の人々とし
らん世に花やかにせられゆくひてゆりきこゆ
河　こゝにはかくしう事しとこの記付　琵琶道
花　水原云こゝにはかくしいふ母のかしうむゝもあれしなひくる
を仮りしかれはあてゝかゝみてゆくへくかゝとへる御をとなのゝふ
いひかた事とい云り
花　或説云琵琶の上ハ人ゝり妻に琵琶にせられ
　郷にて花やかにせられうるゝうき可用此義　花鳥
秘　补変と説るを今りとし
箋　おさんの上ら御其をとらゆるゝ事それのてらふこて
　いまとらしらへりうて　秘　中宮なり
箋　兰の深切に大宮の御仕めかいくんゝしくそ深き御里御云
　出んとて中宮のちく居ゆるし
　人のそれたゆそよいひとわやしくいたう御しき　秘　中宮の御し
箋　此次は人の気ねとけ云ひ出る事し

花　兰つはくらゐしこゝる御ゆるを出さるとし
弄　よかる宮のゐる御いひ出んとて人々それ次ゝくみしいへり　荀の
　人の宮ゝひよかうひられそのゆきしるいひなし　深き兰
　の兰にふむかしきる御せのしみやといひのきんとこ御ふし
　られしそあそれくて　箋　かりるれくわり
　此らに人のこゝんこの　秘　少将し　箋
　さう宮かくりてなし　箋　中宮のよ御とて人ゝうるとか少将
　ありそうしとこなえしなりたり
　らし此は世にやめられしも　箋　うちこ女の事し
秘　中宮の御しよかりひれ宮の事とさりいうしし御つり
　うけ御ゆくよりし御　花　中宮のそん君ゝうしし
　すくはこうへのしられと　箋　お後のいりらとし
　すらうけよむかひこゝんと　箋　後のきしと御成し
　あられはあわしなりけし　大宮つよ似たるかゝ衰にあるし
　こゝあしかうあゝし此あたゝある
秘　中宮の御男やりはらく大宮に似たるとゝ云人にこゝとし中宮には

さうなく／＼ハ大宮にハ似させ給ハぬをおほかるゆゑにいへり

花 中宮と姉のことに葵上の御かたさうなく／＼たとへていふ河

らぬうへといふにはさうしこ身ハよく似させ給ふと也

わき浦しくりてしなきとあり　花 ゆかりノ字さりとみゆへきこと

乃姫宮にふりてしなきとも似させ給ふなるへし

箋 花鳥 よりてなみれさりとこともなし

葵ノうへかくしもてこそ　秘 葵上のこと

む 葵上の葵は御かたと申侍るし

箋 葵上乃心葵上とハ海ことかしぬるものやうにおもひ侍ると也　明らかなこと

車とハ長くてもつとも花の宴をいふへきなり

さうへことゆへわきもハしこそ　秘 かゝる御詞　箋

いさやその前をこころ見れ給はれ　秘 中宮乃詞

箋 れかなかくもかなかたくたなわ

物ものかたこれまて海さもしてこそ　秘 大宮のおほせれ物かたみなと車ハ

中宮の御身のさかり乃ときにたれり侍るへし

私にいハ八文の姫宮ゝらあふてしかくらう海へり給へる車侍りし

給かくけれはありしくとし

さうとちりこちあはれめく　私 あまりてともあまりてもまへ中宮のまへ

れとらかきもかうきりさてかもしるみゆるの中にひとやそうへんや

宮へりまて見めくと葵上の御かたにて　秘 宮の御身さへかうかふにみあひあ給

みなひとつれさ海もちらそつく

とそへてりとし

れかのふかきしこつんかふ　秘 葵上の御かたまて

ことれこのひとく　秘 瓦八文なかたり　花 箋

世のよつふさしうりなるなるへし　秘 花 箋 同前同

河 むらひとくるとこの子さふかかわとハ何よおもふ人の菜とつまく

秘 落胤披なうとなかるへしとし　花

つくりみてハおかしくハ　秘 かゝる御詞

さなふこちりけいふうて　箋 中宮御たてハさなりおひのふて 覚也

多くの新にともかれくおもふとし　秘 中宮の詞し

くりしくもえなむとや　中宮とさることかなわとし

あかりいきくかよりとも　箋 極所とものさハいふくと也

よゆくも中にて玉のありか　秘 蓬莱山とてあり 楊貴妃の事

弄 方士事也　箋 蓬莱の事 桐壺巻にみえし所をきゝ宮ち

日かきりも化なとし　又蒙求 回虚上下東極絶天海跨

蓬壺最高仙山上多楼閣西廂下有洞戸東嚮闔其門署曰玉

妃太真院 長恨哥傳 陳鴻

いとさまことにかきよはめること　秘 此人とちかくきこゆへき

事ハわすれねとたへくさめつる花よりて 葉のかくなつかし

いさやいかゝ人の心ゆかしきも　秘 中宮の御八宮の御子ならて

あれ給へさらしことなり 花

くちおしけれと　河 口惜とかく思ひ捨かたく

中宮のおもれハ口惜さことなれと 葉の心くらし 此切なる御こそ

こそかくおもへともおもひさとし

いと宮さし有り　箋 若陰よりのかりしなり

む 若陰見御ふし　私 此若陰今りとハ陰奥当たりここと申そ

うしてありなんや

母なる人のうれしき事かなしく

秘 ともかくも宮の御ためにハいとこそなからめ 花

かのかゝりしハすや

箋 源氏は中宮の御かたちみえしおもかけをかへしゝたまふ

御よそひハいとこよなく　花 葉の山里の御やうなる人もの給ひて

秘 山里の御やうなるといへる御よつきもうくのかたて 箋

箋 抄に此ことは母の事未の所をいへる 前義也 或ハ人とかくし給

御木は人の絵より此なかといへる詞成書の事をのたまへてあり

まれてうしろハ詞へかなれとのゝし

さまてハいかてハ　それかともおもひくの此なをくハ三ねと中宮の御

御り宮をくかくらるゝ也

秘 葉のうて中宮の御身とかひのかんしらすとハ雅し 御けて 箋

あはしきさてもハなく思ひまへる物から

箋 中君の人葉のたいこれるなたるわ

宗せらふるうたかくハありておさえを

箋 取沈しあるいは思ふくありてのされハえきぬと葉の御うらの内と　河 取縮し

中宮の御ありつ給へりとそうくかり

秘 にほひ残れるとて人のみること

うちある色をくいはゞ匂ひのかほりしは

箋 此の歌は中臣の内へ入て

なげきこちたく　かゝる詞をいはゞ

くれぐれとかくは　言葉のあやとは筆をとりて

とりあつめてよくなんしるしたるにて　花練し

花練詞練志

うすらかし

秘 此歌の心よそに言葉はさうのしゅんをさかしげなり

栄 言葉は練しからねどよく覚えたる哥らかなるゆゑなり

箋 好色に練したる人なるハ詞のいやしさかなしけなし

かくりしれるやうなる人も　箋 深く思ひていふなれど

まことならハなるべき　箋 実なる人の作れるも深く思はる心なし

かくハあるまじく　箋 かゝる後家とハ鶴らしくハ風色のなきことし

人のさかいのもありけれハ　秘 歌のこゝろにけりける様にありけること

なりひらの心さはりは　箋 深く思ふの事に心はいひてぬる

花ハ中ごろよれもしほかにといふて

いろもとふかふなる　秘 大かたよきなるべし

さらしなふ　栄 深くみなりてぬされ

いとうしこにかれし

栄 さらし出ねるとしつり　秘 年へて海なり

年ふりてえんくるし哉名にそとけりとし　秘 直に対面中さぬハ無礼なるとしるしこれハ

いふなるめ海かんとし　秘 くれる此詞し

人のうへみくあいなり捷状たてあり

秘 允姫皇后のうちとる堂と語るねなり

秘 年の詞くてし大后白衣の此ちうゑとなけに語せ此てなりとし

人のうへにてさへくく深く　此ちるとし語るは心なれハ言葉のよ深

おひき語ハさうてしやう此深きうへなる此なるへしとし　箋

栄 姫皇后中ごろの此宝此物ちなる此わし此此るとし

いけし語ゝ女中ゆて秋のうを宿月ゆしそて

拾 秋ゆくハいろある女の風なれやみゆしいつりつ人ちらひし哀

されのなけりを語ふゆりしもきうさ世の中の此はさ海

箋 大友の黒主ゝ歌の世語ひし来ゆこうむく其の末のてう　六歌仙

来し出来て今も中ごろの色若しきさ海といふわし奇 居中出し

私中ごろ出ゝと六歌仙の此ちるとし語るらうしと十文語をしてと

りりとらへあくせんかとし

花 中宮の御かたにもて参りたる所の合せらるへし

さぬ〳〵よたらん　是ハ大宮と中宮との御かたよりけしきなりし

いまとあるもの入にて参る　秘 かけるの絹しるし身中〳〵女ちか

やし車なれハ一しかりかりまし

かゝるにハ御ゑ車なとと　中宮の御つし今ハよろつ絹かし出しらく

わちされ〳〵おほしえけし　大宮の院ちかくて今日を出るとる

さぬとて人給りて先をおひし車 此車なれハ萱の御かわや

まちはやうおかしきとし

此所の院さぬハ　白氏の車かり

花 中宮より車し　箋 白氏より六宮のおりなるかつやけとハ

なつてよこ御つきと車そとしたり

されとう給ひしけるハ　私六宮おりなるとて中宮のおもし

かかる車ハなうしとし

いひきもくもあしきこゆる　秘 非緒の羽しあれとく上のぬ

世したり

りの御在自の　花 御在中宮之まの法ろりとく大宮の一回し

箋 中宮とむこゑ不同く

中宮回数　私一周忌し

ひらの車ほやとうれ　箋 此而とられハにうけつるし

かの山ゐれとこりつふ　河宮梁の寺のゑこりとなる〳〵

あかりてり　堂なり

なりとれとくきこてさらん　寺建立の切徳とい宮梁のし

むかしの人の在ゐるにも御いる　秘 八宮し萱のくて 箋

河 比屋貯人何処居憶明平陽宅初置呑併平人幾家地仙去双今作掩宮漸恐人家盡為寺 西朱図判佛寺寝多し 白氏文集

その比仏さしてうくれてたれハ　箋 八宮と給自よりつかち給

きしうとなれハなり

上御り給ひん人を　秘 在宮し姫君達のおし御とたるとて

寺なとれをらへるし事とらうよひつくわとし 箋

出雲八乃宮の中うと　秘 中宮なり

の宮の給はるも　箋 此而も白宮の御外知といゝへしとし

こゝかしこ寺よおさん　法古えれ地かしハ始て行くし
行つらんきせうゐをわまとハ　義 使かしせく先んし
代ゝん度とらしなんらく　秘 此度とハ寺にかりてあよ度と
いけへさしとなり　哥義
とさ海うさゆうふいらるりしちくなりとん御仏し
秘 行先案乃延着し可然となり
義 寝度とは徳んを凡法究りー出へさ仏寺ふかりて然し仏の切
法れゝんなりはらへし此は公あさらくくらく然るへしとし
同様ねゝら仰しらし
かと行しこそゝ人のとつらて　行 或傳記云觀音勢至菩薩の
子よそおりしまりけるふ徒每の為ふこれさん仏まとハ子の執らは
とくひよりきく海ま仏存よ入ゝかつし徳えとゑしく
哥 見河鈍意蹄に同様し仏よ仏存よ入て後えしけり
秘 行よつんてよるりゝ友れ名ゝて於れ絶かる壱探く仏存ま海へ令徳ま
義 鈍意蹄を同様れるに止不人かしつかれしく寝度とこ徒至
法りつゝくのけつゝこそねらるやうれ坐しくれとも行しらし

ちよふかし待りつゝりにを拝く仏よめかるてらし かにらし
多にしきてとなり　秘 退てし不可然るとし 哥
こらしれらせ　行 暦博士し
推古天皇十二年甲子正月戊午始用暦
仏の法おしへのまゝく　寺とこる様も来ゝ仏説かりの法人令るへし
らくれをひさとめく　秘 宣の定め給ふし
此さひらりしそハいんあし、　秘 めくし寝度とこおりへかれハし 義
寝度ハらくえ法ゑるへきやうあり　秘 每に宣の宮ゝつし 義
来の身よりさるへき能あらハ　秘 中一云乃方し
またれへさ秘あらハ法右の人へしてつらせとし
兀拾大納言の御ふさ海　秘 極ましし 義
めつらしくおりし海らゝん　宣の迷ふれるとし 哥
られ御世よむつましく　秘 今宣の行くらりらくなれ行ゝハ極ま
ふらくやくつへありし　法法湯飯あるへしとし
海くれゆらぬかんかへそらして　義 極ま八家大つきかしの坐し
えまりハとれしそ　秘 中宮へし

いろめきたれは筆とも　大臣の筆し
こあしくてすくなる　秘 臣し 薫の心と
花 いあやしきハ人の心むけのこ御やうなるとりふみくらなくおふまかせ
ゆしきもみてうなへり
まれはらしハ　秘 中将の君のこと
心ゆるさしん人の思ふるハ　秘 いとれ人なくにハ思くくしう
わへしく人まつへきたなうそにとし　弁箋
これよハやしもふく　秘 薫のよハ情しきくおりてハあしてそやと
めへき頼る志給ふり乃守れ心ととり合くさるくく人得と箋
つれるともれるを　秘 中将の君のかのるれり給ふし筆と浮舟のること
京よ此は侍らんとハ　秘 弁か詞
箋 浮舟母なとの北京とハいまこ弁ハ志しめし
中将君よてさうひたうつ　いとふ心の母今ハ常陸介か妻八
宮の北方ののしらるとし
さりやあらんとおほえてうの　秘 八宮ハ家の北方とハ見てなるとし
箋 母君ハ浮舟し父れなよ八宮の筆さうりののし

引しつらふかしせ給ふにくる　箋 それより八宮の引しつまくかり
なり給ふしとなり
くしたなく心まくえさうかうん　箋 八宮の職事志給ふ本意に
さうひめくうれハ此中将君の退出しけると
みられ心ふのさの色へ　今の常陸介し
宣せくあららくれハ　箋 八宮へ申さしりて北詳容なとし
さくきこえさらみなりて　秘 初ハ陸奥ちさしたの今常陸よ
なりくくてれるたなり　箋
の家るハようて京より　中将の北方なりへたわ
さうらくなりふる　箋 浮舟の年し八宮の北方うせたのてに
又陸後の事なるへし
くらしく中す思さうあ　秘 うけるれくて
わくやしとうく心思見て　箋 ようくうのく薫の心よ入るとし
すうしれは宣へひる　大君よ似る人とし
みすまへあへさりくれと　八宮の北母乃おもふハれのかへさりつまとし
母君の北の方の北死んいたうり　秘 菜繁とくもらり浮舟れくし中

ねつみさへ舟かいとこしぬいなり　蕉
舟もなき身とあなかしこ也　浮世の舟中ねつミさへ舟かいとこあらし
そのうへハかりかく　舟ハうり身にさみ夜中ねつミハ八声ありや
大幡かりしらり　秘 浮世のうしの女房し　其箋
りれはくりふあき　秘 八声の御墓し
らへおられくりてまへる　秘 蕉にあわしくし
本うらしれあしくか犯りて　秘 京乳あらへなり
とうみてえいくもりれ　蕉 懐旧の心ひ良の京に乳よにみるの
いそうれぬなり
こごふなうとすらし乳のことこしせあひく　秘 蔦の事しとと
河 木蜩ハこれ類歟
苑 木蜩ハ木ふ付くる虫乃名し
花 蔦の事し一巻　又云木ふとりつくる虫のうしの事しとと
蜩 竹活切 身小虫し 木蜩 玉篇
蕉 蔦ノ事しか葉のちいさんしりうせしいうみてやせしらり
ありへしおりくて　白らあへし中宮のはうへなりへし

蕉 庭より本しらるゝくらてハ本末の分ひわていふかさるもしらぬ
苔の名的とらんハさるもしらすのしとし地して蕉ハ一生の
より小なくとらる様へ万東坡か吾生如寄耳といふ事もてくい
くさもし給さぬさうとし
蕉 かりの神とらて二乗をさへあるしかもひねるての業縁の心とも庭なし
私庭より本のきの字ハ庭よりてみてらくとさの字の心あれ
おりてハ本の字なり
九舟居 わまとよろふ本のりとやとりさしとらるかのかれとのうるしき
秘 浮世よるかまに何ともらりく一乗をとも何し給へる八海よ海か
らの苔とらる給へる有もし哀なるとし
蕉 私ノ字か捨なり
いさくれなくさあまふ名　ありるれ心なり
まみより道ちなり給へしおしとここまあり　しらゑと為なり
花 まあよハ中宮をし
秘 折苔白まてあらしかれ時かし
らかみの空まよりとそ　花 三乗空まより二条院へなり

秘 三条よりとい(ひ)り前にて小の儀よ高んみてといり二条院の東おもてと云 箋
まへの内もうしきこしめそすと 箋 京まてうちあらはふたとなをやあらん
と白氏文集にもあるをあれハ中宮の人うしく見えとし
月次なるにこゝろ 秘 父の詞し
いふかしきは女院の事 箋 守治の辞し
河原の院の事は御わたりくれてれし心々にさせぬ世中の人く
秘 川部司はその宮あり給しをすてさへ聞えけるしとし
季 君はむるの宮の心し
御ゆるし給りてしてハ 箋 彼所は中宮の御方に行給へとて雲井のわたり
うちそへまうしたらく 秘 白氏詞なり
箋 何事もなくさらけなくうきうきと白氏文集にて
すゑはしハ宮よりさやありつらん 秘 萬葉に作る 季箋
あそらよりの給へとうりかしと見えしてうらうらて
ゝやうふうくなりし給ひかたく給白氏おかしく給ゆりそてなるへしと
宮へ中宮の御うちえん見るさ給し
色るりに女へうしやうて 秘 白氏にくのし給ゆる白氏文集

男治へ給しきこし
山さとの白わりきこの 秘 色るりの詞し
中宮の人々ま給し 箋 守治の心し
さやうなるてことそふくと 秘 なるてよるへしとし
こゝかるよいふかの中 秘 かれたとりとめんよりにとして
さうの何ゆし何時へ面このもなり川辺に
いかゝにしん書の中にかかみハ世のうと来ぬよしこさうらん
季 川辺同義の中によりハ守治文集に見るへくりしとし 箋
おもふかなん 秘 おもふかなんいなりくしうへとことのるし
松虫の声よりてなく 秘 てし茅花の色しくれなる給 季
秘 秋の野の草の袂か花すゝき穂に出てまねく袖と見ゆらん
まねく穂に出まうし給も 秘 小松のさ給し御こと秘に見えより
箋 まねく信濃本に来しみて給ふへしとし
白氏 穂に出る物なりし 志のこゝろにまねく秋の露志るくして
季 東流ありしの花しハ穂に出る物しと見え思ふ人へ文
まれいまねく出るとしかてし 万葉箋曰

秘 中宮は下にわたらせ給ひしはしはし御心のまゝし
薫のおりしもやうやうのわたりしはあまとは下にわたらせ
させ給ひて白のあそひしてこのたひは一種数あまたあり
御かはりに[illegible]の為なるおほしめしなりしかは絶えて
出する数あまたありといふは花後
あつかれとて下に物をとおほしめすにきこえて中宮の方に
薫とは浮舟し[illegible]
なつかしきかたの御方にて　秘 白き菊は[illegible]し
うちしつりたるをひきて　かさねの菊はうちなし
女宮をもあはれにおほしたる　箋 中宮をも思ひはなちて見へらし
琵琶とは大宮の御かたにはなりしかはしくえらへし
近中宮 おくれたるかたの宮にもさしつとめの為かの中に風とつけたるとも
秘 中宮は白き菊のうつろふほとの御ことなり　箋
箋 あはれなる前栽ともこそ見ゆれ　六宮の御たいめんのおりし御ゆかりにまいらせたり
ましきさまにて　秘 花箋同し
河 大宮のこれはなに事かありつるにかへり給ふを見るへくもあらぬ
らしきおしはかり給ふ　白菊なり
うけたまはりし事もえさらぬ事にさふらひし　秘 薫のかへし
箋 菊のうへのあそひはしはしとかくいひしく白菊に見えて
菊の色をこそ思ひやりておはしけれ　花 尾花のさかりの時に合わなし
秘 菊はうつろふ色をめつらしくおもふ心の友の心をうつす尾
花の時にあらさりけり　む わかるゝにほひかれ
まさにほひもそのかけにさせ給へる　むかしのせたる花はおもくさくし
なくてまさにあはれなるに　白菊はあはれなる
箋 白菊は薫の御かたをよそにみ給ふ中宮のうへにおほえさせ
いかなる一つの御ゆかり　む 菊はかはらぬ中宮のうへにおほえさせ
私此義可用
花の中に此ときにめてもてはやす　河 不是花中偏愛菊　此花
開尽更無花 元稹詩朗詠にあり　秘此詩引り　箋同
私是は菊に付て此詩をさし給へり　唐の元稹か詩し
なにしれんとの心めくるゆへに　いまし一夫人のまうけて琵
琶の手なしへけると　河 西宮左府庭前具物除君樹上託不遊

小児詠此詩教作者之本意尽字急請琵琶撥秘手曲小児醒
一一扇叢武之霊也校上元石上流泉曲　又天人ハ比巴を教へ

花
けるよしハ寝覚物語にもみえたり　ねさめの中の君といへり

河
西宮左大臣のむすめねさめの御子たちハみえにといへるなるへし

秘
て人のくたりて寝覚物語よりはるかなる事にや

代々ハ奇瑞なることなけれと八曲をつたへし事ありと　箋

箋
筆のすさひにかきし比巴の伝へくはしくいへる事ハ

西宮左大臣高明の御むすめにてある時さゝ小野しくゝ

いへり天人の比巴の手をつたへたる事　寝覚物語にあるをあはれと

見しかたかりしなり　寝覚　浜松の物語と狭衣の清少をあはせて

紫式部源氏物語と法花のなかにあてゝおもしろき物語にてあるへし

御てしりにあはれなりと

花
夜ハ比巴を吹よしといへる法の数をハ尤おもしろくいへるなり

秘
比巴し

花
比巴し法の数をにいへり

からおもしとありて

秘
中の君にくし

くしそあるへきものを

秘
中の君の詞し面白詞し当時にて心にくゝもてなしたる所に候ゆゑなりと　箋

さしいて給へりしとて

箋
中の君ハ筆をとりてかきなりけれ

若くよいて婉人

秘
中の君の詞にて入日を吹返す事也とそ

かかりけるも面白くて

秘
白き詞し

秘
謂偏ひあるとも白きおもしろくいへるなり

にほひやかなり

秘
六君なり

ことありたるさまひとつ

箋
神仙なることゝいひて

その中納言をさそひぬるしし

秘
此中納言謂非人可知也

秘
筆にし花鳥にも不審也

女ハいかにもたゝかなるへき中なりけるゆゑにそのかたちもけにやさしくやさしき中の君の御心をしく

れは中納言の事にやはりかしそ白きかなと

花
筆にかきてし文義ことに不審なく

花
筆にあてゝ給へることは白き根ともかな

かれ又ありてもことうも給へり

秘
筆にかくへきかとし此詞にて筆ともかくへきかなへし

ゆかりいゆかりたれハ

秘
比巴は上下英徳調のうち合せにある　花

箋 枕のうちにいとくさらにしけれハおほ盤渉調にてかへて給ひて盤渉ハ
律の調なりて、いとちかうなれハ今めかしう弾なされ給ふへし
伊勢の海うたひ給ふ　秘 白文催馬楽にうたひかけし給ふなり
箋 筆乃音とやあるべくうたひ給ひつゝなし清き渚なりとあり
河 伊勢乃宇美乃支与支名支左尓一之保加比尓名乃
利曽也津末年加比也比呂波年也川久末也比呂
波年也伊勢海
花 伊勢海ハ律ノ哥也盤渉調ニ律ノ平調ニかへらるゝか又さうかや
郢曲乃家にあり勘へし
あさこえおりし海きハ　箋 白文の作集等何ゆへつれの時
おもひおもひかへさはいくらへて　箋 中言のおとともいかゝあり
みつからのもしけるに　秘 宇治へ渡り給ふへき御心なるし
三の宮こなりおりて　箋 白の二条院に帰る道也
かれとのあはれさめてく　秘 六条の院つれし
おとこらも出きたるにうちまて　いとよくあはれなりきハ
箋 夕霧内より退出し給ふに二条院へおはしますへし

しらしけるかさ御して　箋 白氏と篇し夕霧のさ御とこそ
つらくのあやなり
しれゆ給へと　変憤とかくくいりくて
わつらふかきり給ひて　度度ゆく夕霧の白の家あり給ひて
ひとからとなの紀とせ給とて久しくなり給ふと
花 此院とハ二条院なり
秘 夕霧の羽し此院とハ二条院し六条院の御後へしくてちうなとし　箋
迎て門つよしきこえし給ふく　箋 連軒し
なりく遇くもわつゆへてくりしいとおわらな　箋 中宮のこれへの心を
くりしいらかハ扇の格もし痛ノ字の心し
きらし此おりしいるあらうる　箋 夕霧ゆゝそへとしのわゆかし
御かるもの似かつ色こそありける
箋 夕霧の子息のさら似つらしなりとし
此むへよ高り給へるとて　白文の作述に高り給へる紙こゝらの
なくなりなり
此らつくきうしかくことをいひ出るなり　秘 中一定し

中宮のくし
ちゐやうある故ありしひかり　箋 さいくうこれ来し
紀んやうくこうり表あれこそて　宮仕へ道のるし
くらゐてうしもられぬ　秘 二年薨去すくられぬるし　花
正月廿日わこしよりもしいかゝぬさ故になりやうのみ
花 葵卅八才崩れ正月し早蕨巻れ年ゑて次の年にあたるし
秘 葵卅八才崩し早蕨まて年ゑて次の年にかゝるし中宮誕生を
所く有し去年ゝ月より懐妊し　箋
花 去年四月よりは懐妊なりけれハ二月にあたりしもかり
又いまうしおりしきつね年ふりく　箋 白れ産ありのるくと知まゐらせし
みくらしめさく　始よりあこなりつゝ所法のうへには安からまほし
きよいの事かり　箋 明石中宮よりは中宮とこつかひまゐらせし
つして三をせよぬあまて　秘 つかひ始めのしより三をすぬし
花 中宮る事のつかひのかしより三をすなるなり
出うらし給の後へうしこそ　箋 白事久しうして難儀になりまふ
立寄うらハりてなりしやさやすしなり

さうし女二宮の御裳着　これおほよ葵のうへとかつく拠くらう
秘 葵の上給へきこて御服をとりおきて御裳着のるをいそき給ふ
花 うゐくし御給ふうしし御母后の服よりくのひらうるし
所うしるとかり給しとて申うしめくかけるあて　けあ
箋 母女御のおりをめ奈る御門の所らいう葉を於く是るくるゆへ
給る事これ院の御悲嘆あるにめくらく人のあめてあんぜらるし
所く色所　所給物所し
秘 物のくさりたなしもうぬし　花箋
そらうらもたなし　秘 守小伴代うるし
箋 受領としやられ係附の課役よる給ふうし来し
秘 よ小書よ朝庭度給来し一事とる事を八条守三位所
いとた奥どうかく定りうゝ給たなり
やうてその所と気りそめまつへらやうよ
給ふのへきうとし　花 私御裳着の給より葵気り給へしとし
男うてもくつひしまふ給たれと　箋 葵の方れるし
まいのてしたれハ　秘 ゆかりるれゆくせたりれなし

らの御事のこ　中宮はおほしめし

なほしわたらせ給ふに　秘 除目の後桃園中納言参りて其次に何某を

率して代々いかめしうさぶらひけりや　抄 箋

河 直物 懸召或京官除目已後桃花直物ヲ申行シ或除目以後為三日ニ行之也

先度之除目違乱之事等を改め直さるゝを直物といふなり　薫の何某宮仕事し

於大納言の奥には右大将も在りけり

大臣の御前にゐたまひておりしかゝりつゝ御供つかうまつりけり

抄 竹河ニ昇進めけるかゝ大臣大将ハ兼帯し　不可記内大臣兼大将なるへし

秘 紅梅なるへし竹河にては昇進して此物語源氏以右と見えたり

箋 此右大臣紅梅なるへし 大臣は右大将なるへし 大将を辞して此時の

右大将左に勝るなるへし 此薫の大納言にて右大将を兼ぬるなるへし

よろしひよ為し

御車あるへし　箋 薫大納言大将の兼し内裏よりかへり給ふ

あれしておはしけれ　中宮ハまかり給ふに白文二条院

おりれ河の薫の二条にひとよ来りあつまりて

そうなりしさへひとくらんなりけれ　兼右らかいしき物語白宮ト礼

箋 所のさ御つゝきもたれ称そしたなり

おりて為うれしい　河 若菜し

秘 拝賀なされたまひし人よりて之人へ南階よおりくだりて若拝舞踏の

作法有し薫新大納言の拝賀よ二条院へまかり給ふ常の衣

拝賀の白装束也又直衣下襲にて若菜巻にかはりしき事なるへし　笠花

秘 おりて為うれしう拝し花よみてしより　箋

薫の大将常なるへし白文なるやうし下襲の

作ると此への後ゆかりし此所よと　河 大将拝任の後此有る事よ会

迎へる文を請し中へ為らし親王有る事此例一の御くら

私白文者ハ階下の請しいさ候へ此次の御事は階下此所之事

とて有るこの例よハおりたち新へし

兼 大将のつらさらに緑の小所へ右白文をとらひしし

花 大饗よハおほれ河海説不可然大将よハ大饗有へし此文ハ階下

云ひて大将よりとの人々云ひ侍ると　笠箋

秘 大将饗の時ハ中少将將監以下かしこまりて拍請有るへし親王

云ひ階下此前にて請儀なるへし

花
西宮抄大将初任饗除目畢大臣以下参議所座大将暫留於
射場殿令奏慶拝舞了（此間可奏饗食之由也）渡南階前退出之間近衛
等候庭除忽然叙物声撤籥於砌干時宰相卿及次将以下出
従敷政門向里亭次将以上垣下云各参庭（上卿ハ参庭外 次将在明）先近
衛以上六位官人就庭前欲拝訖参庭中座次云及中少将
等座立机相次立机食床於座中給六位已下肴物盃飲酒等
之後被物循等各有差但新任大将若在里亭有引可示其家
欲賭弓勝方饗准是可知此日以親王為垣下無故實耳勘物
云大将上﨟不来有親王大将着中将上　今案大将初任之時
その方のおほいとの垣下に請して大饗の事のついでに禄なとたまひし旨兵
部卿の宮は饗の座へ請し申さるゝ御あひやとゝめて人々まとゐせてお
はしましき

右の大殿のりゆみのかへりあるし（のりゆみ）
花 又云大饗の例にまかせて大将の儀式の禄を六条院にて志給ひしし 箋
宮たちの御子のちらかりしをもあまたいきやうにおはしけれ（ゆ）
花 垣下の親王と云は客人へ請伴する垣下といふ也（垣下ノ大饗之事（に）也）

このたびは大将より上首の宮々はしもおはしまさぬ時親王はしもみなの時大将
のつかさの中のつまなる白家にて垣下の座に請し申さるゝ河海
に親王為垣下例引かるゝ記をも漏らさるゝ也 垣下とは
云へしさきにも八主へつくれ 箋
これ宮もうちに給ひて　奇くしめハ禕退し給ふ入れよもつから
給ひしたり 箋
まうちきみたちあまたあり給ふなる（いそこらイ二入）とも太子の御方にいとあはれ
箋 中宮のかりしたなくて御わり給ひて此事六条院にて催され侍るは
二條院を御すみかとて二条院はあさゆうまいり給ふへし
秘 中宮にて八宮の御女なれは六
おとゝへしもあまたの御子たちのと
宮はさの御おとゝり給ひてこそ事なりし なりし 花
おほしおとしてあしからんと
秘 又云これ栄盛なりけり
とおほして中宮なとはおもんはかりよりやう
事とおほしてめてたまし給也
箋 中宮の男子たちしり給ひて
おとゝにて生れあへると
箋 蓋大納言大将の昇進にて
大将殿もよろつひきよせて

かくこうと御いの衣服ひめかへなり　白衣の蓋の裾とおもふ所へおくなり
よくおりしまりしめり　誕生の衣服なり
此れよりはしめしらそへくさあしら
義 白ひかゝらは産穢なれハし
くありけくしませハ　義 産穢れあし　白衣し
ことはもといの内宮の際をとるしてとかく　花 白衣し
義 白れ衣あらけあり
又日の衣を大内裏よりとんしきあ十日まて着御す　河 囲碁之錢也
秘 碁のこと物なり
如此乃時碁をうちせあそひしかるそのうちもあそ勝をとられて
花 李部王記天暦四年七月七日是夕藤女御産養産婦饌衛童
十六合破子食七荷屯食八具碁手錢二万贈物児衣裸各五
重納支作木莒二合（有白キ絹裹）使大蔵丞藤原守忠傳言云物是郎
陋今宮所贈盍可有恵報云恩備至恐喜兼深況兼宮恩命折
恐無極郎纒頭白細長一重袴一具守忠今遁出門追傳報賜祿
こゝらの女房の碁にいくさの二十ちとれ御そりへをしのきてはしりけり

こゝしれとさしくしゝくれ
天暦四年閏五月五日此日自中宮給産餉息所前衛童女枚
面折敷等用蝉翼有銀筥等上洲濵等酒壷如々如例有男女
房饗各用朱臺盤荒純食十具皇子御衣十襲（五具唐綾　五具平絹）襁五具
納深折櫃四合置中取二脚（九條右丞相記）
同記云當第七夜姫君政所設饗息饌所御前衛童廿前緑面
折敷有銀筥四枚箸上洲濵又有酒壷具又親王公卿料廿
前毎前繪折敷四枚碁手五十貫純食五具（冷泉御誕生記也）
四條抄云右衛門府奉碁手錢（盛机出納所召使衆前置高坏宮人取之王卿傍）
新儀制令停止之　依例或有囲碁之興此間或府督勸盃之
義 此支天暦ノ年冷泉御誕生之例といへり　又御子うまれ
とき産婦いへりおほくはいはるゝことなり
又の日帝のとせんなんとの物いふさせるなりとかく
秘 點心芸といひしあらし　餛飩うどんといふ同　河 粉熟し
花 影熟ハ五穀をよくよくとりて粉にして餅となしてゆて
甘葛をかけてくふ事なり

としへてまいりしつきせぬ盤雙六の調度めしてこく

まゐらせ給ふ物語内侍のすけの御おもくうけたまはり人の心さしふかく

られ給ひし世のふることもうちかたらひつゝ姫宮をまつり

紅葉ん深くめでたく花鳥の色香をも(?) 明石中宮

七月の秋はきさいの宮の御もとにならせ給ひ

宮の大事とくらし給ひ 秘 中宮の大事なり

箋 御あはれなる御けしき

内のおきこしめして 秘 はしめてかくし八御叙し

箋 主上し白河のくしめかる御事にしまては(?)しめしなり給ひて

大臣のもとへ 秘 夕霧なり

箋 白河へおはしてむさしの(?)

御かうはりも 秘 中宮 東宮紙し 箋

なりぬれは宮八年中に(?)くや 葉のやうに(?)かた(?)出来されたる中宮

のいかにもいとくちをしく白河の心さしもまさりたる

いかてかくらんとおもふにくちおしかれとも始めの御

うちそへ八年(?)して(?)御ことなとしる葉の御世し

その月の十日あまりのほとに 同月廿余日女二宮の御裳着ありて 明石

秋葉のあかりて御たちこて秋の御(?)法の(?)儀なりしこと

あへれらしたまひけれ 女二宮は八代葉と(?)かくし

すくしおはしましけれは 今上の御心とけ(?)なり

おほしけむこたなる人へきことも今とおかしきこれ御代に

あらくへのやうに年ころいそきせなるあくらへやかけて(?)

秘 花鳥のよりそへり

花

嵯峨皇女潔姫通忠仁公宇多皇女源朝臣頎子通貞信公醍

醐皇女勤子内親王配右大臣師輔公同皇女雅子内親王康

子内親王共配師輔公同皇女靖子内親王配大納言師氏卿

生一女詔子内親王配大納言源清蔭卿後配河内守橘惟風

村上皇女保子内親王配王配貞信公盛子内親王配右大臣

顕光公（保子内親王配入道太政大臣兼家公とし 貞信公非也 相国冬良公押紙にあり）

今案ちかき世の例皆以脱履の後或は崩御の後あらたに

まして女院の御女房下の配るまてかなしと承る(?)儀潔姫

のかしこきこと漢朝にはその例ありそれとは尚ふとしかくて

箋 こゝろやすくやありけんとは御法の時の例には延喜帝師輔公の例と箋云

私 師輔公の事可勘

大のおとゝもあつしうけ給へるへの御おなし　秘 夕霧なり

箋 夕霧は葵の上の御わかれのゝち落葉宮はさるへきひとゝもにてそのゆかりなり

御法のあとの事まて夕霧のうへにこゝろをのこす　弄 源氏の事 箋

私 源氏ハさかりの御代に葵の上と年月をおくりしかとそらにしられし一条宮なる

やうに夕霧乃宮その心なり　秘 女三宮なり

うれしくもやと

箋 葵の上乃母宮女三宮となりまし

きこえまして人をゆるされぬかと

む 源氏ハ夕霧の宮をしての一条宮の御息所にて一条宮ハかの御いさめあるへし

大殿のよりくしはかく　秘 落葉宮のことし 弄

秘 女二宮のこと　弄 今上女二宮の御こと也 箋

かたみにかくこれおもしろきなり

そのかゝれともはかなくこそまつのやうにまて

箋 大殿にかよひの御あつかる

なにゝつけてもおもひのこさし　私 源氏ハ大宮をもてなすにはやうれしき御事を

其うち侍しき御かたへの御年月をかくしかまりける心のおもひのうちにて

こゝろしまくしつるなるへし

いはちかふハかたはきことしとそれ　秘 葵の上の御ゆかりなり

箋 大宮は事なり

ゆへてさせ給へんとも

箋 葵の上の御かたへの御事ハ近衛の室宮へうつりたまへんとも　秘 葵の上のいまた有らんとし

かしこまりあるへき

こゝ宮ハいとゞまさしう見えたまふ　秘 女三宮なり

おりしまはん宮ゆかりあまし給ふく　弄 女三宮のおもし御ことし

方とゆかりんとし 箋

御物ふれさまあり　女三乃念誦堂に

みしおりそふかけるひとのあへき

箋 宮おりて女三宮の御つかひ給へる御事さしとし

内わたりきうせ給ふらく

箋 葵の上の女二宮は御うしろみゑらせ給ふ月かけかれの御ことしめさし

ほかもかうちとけかけるひとのかたらん

早速に女二宮室宮へ御渡御乃事いつくの御心ともし

心れやうにおもひしてたえん　箋 うえまてもこそおかれたるハ同しことゝし

くく宮乃ゐのりとふれつかひ　秘女三宮へ勅使として長寛

比あり宮乃御事とハ　葉女三宮とし兵衛佐の御使勅ありてとて

もおしてうよとれは御恐怖なるとなり

そうせさせあふなり　葉女三宮よりうよとへ奏せさせらるゝよし

すめしいりくとし　うよ女三宮なと御ゆかりなるへし

く服んてとおさこれしいるも小　葉の心中し

ものうらはいにうらもつくくも

葉女二宮の比よくもされしうもう　かゝれなるへし

宮のうつ宮のいくふありほうとハ　河五十日或八百日御餅の事

天暦二年八月五日依宮降誕之後當百日依世俗之例供御餅

朱小御臺六基御匕箸乾荷葉四種已上銀器二基唐菓子八

種二基餅八枚一基等已種以上成年盤九條記

花子誕生の後五十日といひ又百日ともいふ又日儀式あるく

餅とそおふるなり

あおくらしとさ海く車うらとと　葉細工氏のうへのへし

ふれなりうやわくんいうちとうらしおもしくそく

秘葉の色さ海し界とおりくとありそ御門の御舞ありし

いおんさうりきもしつくしかりし　秘中宮のへし

葉葉の御舞ありり界とたりとをあれしへやらくて射向し給へりと

わりしおらむれ宮おきよゆより海くて

葉葉乃裄し大宮の事おもとこうとあさ海なり

れ宮とおきあまらひ　秘り有る祠し　女二宮へ来りうるの事し

あいさらたるくそ　葉とうのかゝれたなり

いとつさおうし花比てとくか　秘中宮乃何

へとしてよのつうらうりきく　宮なにて八稲へとしし

宮まとうくこひありしへんこふうさよ　葉大宮れるとも宮より給ひ

とへふくわりまし来りく中宮のひし

おりせるし久ハ　秘大宮れ事なり

葉中宮のろく渡し

ようをさ海乃りふそうしゃこなく　中宮のへて　大宮のおりせハ

六宮れるい代ふうやうふ女二宮の事とてこりんとしうしやしらへ

とハ中宮と大宮よのひ日おとなうらへしといふ祠し

うちとけてもやすからんと　秘中宮の家司なとにうちとけて後
悔のくやしきことはなくみ給ふとなり
箋大臣の葉なとにうちとけさりし人紙斎物ありて家司よりくへ
く中宮のおりひまうて
よりあはてしきよりよつもとくうしとらすこころかえ
箋葉上の中宮へ心やく御事はあてこともあま事なれは只一行の根也
おひへしこれかれるよは葉上の心よもあうりしその中宮かれしと
見えてさうしうこさせすへきさう御事なれはおくけなりんやる
秘あるとめのそれ也しうるし一段あく心ひたむきとなれはに　花
わよろうつく心けなるすそしうしれ見えはあ字に
惜まうへここすまふてわくされは内うしれりてたのてこ也すなわち
あやうふ物語し　花 諸本にいひなはわれ給ふとあくらのふ
すくしたる御たり
よう物まへてあまわかしく　箋 葉上のあまよりしきとしさそりやうの
事ありてくは世中ふかきまるくの也来あるかしく葉上のよろう見えたし
世のおりひくあれはらく　秘 なんあらしくうしとし

されといつひたりく　いつしひたりくは大臣なり
箋大臣の世よおりてもやうれ子なしわくは紫しうゑへしとし
わともくしけなるわさうりふ　秘 六条院の後ふとは六はさうとし
箋女二宮なとはいつうりもちやく御子のいくきとうしとは葉上の子
いそうもとあそしし秘の義おやま也つり
あまりちへたう紀宮の心ひたるまし　やうふ見えたし葉上の心へはちへさ
掟とおもうなしなまみ紙評し又此次て一段葉上の事と評しうるし
くめたうく様らけくまのはたう本事　花 これよりちうり御きへの
葉上の事とうるし　花 めうたうくとは女しくしく　箋秘
秘 宮諸葉なる紙詞し心くて御らんしはあうる所そてるきうめとし
箋 まうのひかはしは葉上の事とあしくいうやうなりし也
悔まうしかうこれは心あわらく　箋 葉上の経称と今とは紙給へし所そさ
しそれ算ふは宮のつうん事てしきこ方こそおりはうんとあ
もうつへしよ也られゆうく葉なる紙評し
かくおさうあれかる紙　箋 若君紙にもやくら世給つると痛く人たうしと見えたし
くれわまたは秋とうふ常う傷のしき紙　秘 女二宮へ余り給事とてとし

なしれ人の心ちかなひや
箋 藤人の心かりはれ筆のさやよくわりなき紙とし
紅葉のよるひははなのうちさまよひれと夢なかくふと角けるを
ゆかりひとりふしけるや
おりつるとはかりいひやらすに
河右 おりつるは袖にて色へひあれはなるをやうくふるくひきのなく
夜よりの三条大臣の事とかくちよとふあへし
秘 夜座より方角はいとありけり
箋 春のはしめにて正月をよふ心つる王相とは正月寅より始まる
卯月ついたち衣かへせらるゝ　河 節分は月ノ節也
花 正月のはしめに三条の大臣よりつゝいつの事
箋 女二宮三条の家へ渡せられし正月の初卯月乃節に入れさせ給へし
あそひて明日夜座さんへりて世のはしく後の花のえんとさせ給ふ
秘 花宴の記々にて候けり
箋 女二宮藤人の罪は亭に三条の家へ渡御前の日に飛香舎にて宴をし夜
は花の宴とは海なして延喜二年の例と成て花宴は天暦三年の
例なと夜の例とれ今も此物語の八かへりて暦三年の例の譜に奏也

河 延喜御時なとしられとも此物語によりけり
飛香藤花宴事　延喜二年三月廿日御記曰此日左大臣
於飛香舎藤花下有献物事左大臣執献物称菅根御贄可為
作御息所宣旨別當也而後列座藤花下盃酒数巡後左大臣
殊仰右大将令献題曰飛香舎藤花和歌則左大臣置御硯連
奉手跡連麪献横笛和琴其横笛箱是美和逢物耳酒盃周挙
群臣酩酊管絃歌舞乱召親王備前介忠房令吹笛賜給
禄群臣有差
花 西宮記云　天暦三年四月十二日於飛香舎有藤花宴以殿
上御倚子立南（有毯代）南廂東一二三間巻簾母屋前立四尺
屏風二帖敷信及廣莚中敷毯代立御倚子南簀子敷同莚同
簀子中間以東敷畳公卿座當庇中戸南立五尺障子其西在
御酒具赤漆火炉一口有黒漆臺同机二前其上有満心瓶令
咋金銅枚件鳥入御酒銀御銚子一口加土器臺盤炭取當公
卿南前庭敷紫端畳四枚其南敷二枚殿上人座御掃部寮令
敷軒廊東小庭畳二行西面北上楽所座未剋御出召右大臣

次諸卿參上次侍臣著座四位北五位六位南供御膳具註誰時朝臣率五位
六位自南庭西昇置物御机二基立御座西椽木作在木蘭地
倚敷物卧但等御折敷四枚立御机上淺香折敷沉裹以金開
之朽葉色唐羅花文緂敷在心葉藤花開組等件組折敷一石
四加牙象臺表紫檀裏蘇芳在銀筋供膳折敷二枚以椽木作無心葉組等御肴四種
生物干物窪坏以銀作土器以當八土盃之供之陪膳退下給臣下衝重
御酒銀盞皿維時臣供之伊尹取銚子給臣下義方朝臣給之二獻飩臣下大臣奏聞召樂所別
當中納言源朝臣令召樂人別當御藏人召之樂所參入奏調
子有哥曲立文臺南庭立置物御机置御硯紙給臣下獻題維時大臣
奏維佳延長側地下人一兩獻哥召庭燎明月亮也獻哥伊尹取文
臺右兵衛佐清正講之左少將朝成藏人頭雅信朝臣或燭地
下獻哥者源滌藤原兼家茨木有時ヒ方等々講哥大臣取御
製召公卿侍臣堪哥者奏絲竹大臣納言渡西大臣取御杖源
朝臣取御琴譜進御前奏云延喜御時御琴譜云源朝臣等秝納言
物名授頭藏人置御机琴出袋彈御兼家被聽昇殿大臣共拜賜祿
女裝束源氏小科袴四位白細長大臣給御衣一襲又以女裝束給之

君のひさしかるへけくりしめなり

花 天暦三年記に見えたり

あるしの家のつかうまつり給ふ宴にはあらされ

内々の事なし

秘 あるしの家は女二宮し内裏は京極より上らるゝ御所なし

左のおほいまうち君大納言

花 久方の雲のうへなり

秘 左大臣にて花宴 天暦三年右大臣為上首ことさらなるを見て知るへし

久方の雲の上にしたるなり

私 天暦三年右大臣師輔公為之ても上首

異 久方しはしたるなり

花 女二宮の御消息に依也

花 按察は紅梅に似たり他別人ゝ紙にて可候見え

私に按察は紅梅の名なりと見え末の句を付て

あり又久方右大臣に時ちる付紅梅大大臣と久方

右大臣といふ事ありて紅梅按察といふ大臣に歟

權中納言兼輔

秘 兼輔卿大臣の息左兵衛督歟 異

花 兼輔卿の息歟

私右兵衛督にて兼輔卿息ハ左兵衛督歟可尋秘蔵之家歟

三宮

おほせられしや　秘 白文なり 花箋

有職の義はむかしより殿上人のさふらひしかは　花 同此事し　私云衣くらし

花 天暦三年南庭殿花下賜近臣座下之箋

こゝろよくてんのうへしふみしけれは人々めして

花 天暦三年軒廊東設楽所座箋

おほ殿上にて小宴ありしは後涼殿の西の南庭にてへし古事に　私云詞こゝろよくてんとのる

ようらうれしさんしといふ御ことゝもらよくてんと謂ふなり千して

まれはゝしこうり此ところを篁なりとにてさせ給ふは　花 女二宮し 秘

おほくとくし給ふ

御前にさふらひ給ふ　夕霧此下し

九条殿の北てつかうまつり給ふて入道の家に女くまつりを給ひ　箋 さうつハりの御おほくまひしなり

しこさんの殿二品よりれ名をしに付し給

秘 入道殿は女三宮にしきうんのふ琵琶の譜なり

花 箋の事せ給ふ宗夕霧のさうつき給ふて此例花宴のふる延喜

此門勤子内親王に給はりける一筆讃御九条大臣重明にも伝はり

てうしと重明の息女女御子中宮の御殿上より伝へて　村上天皇は

まつり給ふし書といへり

此 琴作譜五巻雑琴百廿巻見在書目六　かやうの物とは本は枝に付る

大和の物とはこそ枝に付くかりとは別に奏すへし

花 天暦三年右大臣捧先皇賜勤子内親王筆譜三巻左衛門督

執赤笛一管 元貞保親王笛也 左兵衛督将螺筆一面 元貞保親王拍有奇音 奏名献之

今案天暦三年殿上女御安子は九条右大臣重明御女也延喜此門

御女勤子内親王に給はりせ給へる筆と本の手本御今の物語に

六宮の女三宮にまつり給ひし琵琶の譜に書たるせ給ふし御所の

後撰にみえてさふらふし

朱雀院の御物とするなりけり

朱雀院より女三宮へ伝はりてうるはしのまうる物をしたるへし　是は筆より此殿上人のと拍子頼

笛竹の音にて給ひし　花 柏木の此あの譜の笛し

秘 しうえ木の笛し

先くさせ給ふ今宮は　今とのゝはくかめさせ給へし

大将の此笛は三条のそ世にたちえされの給ふ

蔵 三夕かつらへの筆をも給はくしてかれたまへし
さりふつらとなりけれ　蔵 郢曲ふよへ御前殿とへなり
まのれうこよりかんかくまいらせ給へり
花 天暦三年沉香折敷四枚紫檀臺以上器様銀器供御肴粉熟
有赤漆火炉銀銚子寛治五年万壽元年天盃用瑠璃御盞
おもられむかこれからりき　夜村濃おなるなり
ちろうまれ御かうこ　行 銀様器　或薬器 親行説
色いしハらん箇あり　秘 名義抄云金翅鳥那毀畏神得之出賣
与人或名紺瑠璃　釈名云紺含也青而含赤色也
岩朱僧御まりなれい　岩朱僧ハ紺舞ゑれ息よし　蔵 天暦例如此
花 夕かほれ天盃は毎度くわり給りける車は御禅しかもしまさたきた
御子なれ候てや御かりふゆつり給ひし
おもしろくさりてハらんだりけるへし　花 夕かほれおもしとなれ上前
まて毎度盃給くしめ給りなりて此度ハ信次は御入らりて天盃
と大将り給へなり
秘 天盃と毎度上前給りり御まと親王走れ申ふハあつるし

宗たつしよて大将ふゆつり給へり
つくりや給へし　夕かほれ盃をゆつり給ひしと葉への蘇め名をし
此宗ありきうていくさとらん　天氣も葉へよやらつんとし
とらしよの給へるこハつらひ
賜天盃例　天暦七年十月廿八
日菊合式部卿親王重明賜天盃　寛弘四年四月廿七日密
宴中務卿具平親王賜天盃 已上親王例　永延二年三月廿五日
攝政六十賀攝政 御堂殿也　給天盃　永祚元年二月十六日朝
覲行幸御堂殿給天坏　寛弘三年三月四日行幸御當堂殿給
天盃　同五年十二月廿日後一条院御百日御堂殿御盃 已上
給親政臣例也　今案此後万壽元年宇治殿嘉保三年京極殿賜上皇
御盃寛喜三年光明峯寺攝政永佐元年室町第行幸鹿苑院
大相国等給之也 為後学以次而書之
とらしと云事は海乃説宮今案し一向ふ云しぬ事し申さらん
をハ記りよせよ知らさらんをハ云ふをとせよこれ知と孔子の
梧云もわまハもろく何しとく思ふ事めへし　以 永延二年
三月廿五日小右記云攝政六十之賀也左大臣記座献御盃

右大臣取御銚子主上給御盃於摂政此間被御寿云 或ハ万葉ニ秋
摂政又有答奏ヽ可尋記摂政下庭拝舞ヽとやうれ例もありしハ
ようとりのハ祝ことをつらてうちゝてりやわらんにとのへり
河 已食 日本紀 案之若称此事歟
秘 不分明事し 花ゝ不注し篇ヽ不知事し河ノ説無し不知也ヽ
宴にハ月の方してへ　是も此御舞のくりてうやし河ノ曰
なれハ別してとなり
さうへし給りて　花 天盃と河ノ時ハ大宮供めして御盃
の酒をうつし入てそのひ給しそのかうけ給さうしへしとハ云歟と
りうく後ことの階よりくたりて此前に向ひて舞踏して
庭に降りすこれ定まる作法し
秘 盃れ瓶溜とうつして天盃とハ天盃とハ懐中にうるし哥宣
とうしへしとりふなり
花 天盃は給りたハりうけ御かうりよせてくうつしへて給ゆるとこ
同云天盃はハ面よりのもられよって飲といつらなりや　一説
まつりける後溜とうけして飲そまことさしへとりて

同云天盃給ゆうける時定まうつれるや　一説隋の時定れたり
られと酒しく御舞ゆく
河 漢書曰女子公主注云如淳曰公羊傳曰天子嫁女於諸侯必
使諸侯同姓者主之故曰之公主百官表列侯所食曰国皇后
主帝姉妹曰長公主正三位源朝臣潔姫者嵯峨天皇之女也
天皇選聟来得其人太政大臣正位藤原朝臣良房勅参之時
天皇悦其時擢超倫殊勅嫁之
くらりありて座にへりつき給ゆる　河 下座
秘 位次なれハなり
わきられ大納言ハられそう給ゆをみてし
紅梅にハうへりし
私 此哥家に紅梅なうへしとも此義可知歟　義 紅梅なり
紅梅もなりしとゝ紅梅れ大臣なうへし　右大臣とありしか給
りきたりかのりや　私 紅梅の義で御し女二宮なる給
あらへきらひうけまうへりし紅梅ハ家段仕の桐生の家

聟とらん人なれハ源氏の末しるまてのよき御後見なり

箋 紅梅なるへし

此家の御母女御とそ　花 又大臣の家よりおやしけなるへし 箋

麗景殿の女御 女二宮の母よ梅壺大納言の女と申し事なり 後 花

それハ家とえすらん　後よハ此女二宮にわたらせらるへし

私 紅梅大臣の年齢なとと 母女御よ色ふかけし事お遠さかれ

人かしハかふちさりてとたれと　宿世なりし人とハみえさるし 葉の

と梅宮のそらしらりしくいひやと葉し

時のみくと　　さと御左衛門の事とこ

おりしまれれはらしらの　私 葉の女二宮へ毎ひのうへ事ゆらよ

ことの法皇とここ事をとこ皇ハおはらとらむへあと

それハえんやいかにや　箋 皇のえんれるし

さ流ゆりしけれも　梅宮の色申とこへり

またゆりして斎よとすなる　天暦三年七月十二日記云地下一皇献

斎石庭瞭 月光催し 献斎すみなり

箋 天暦よ亭子院のみあり皆詩斎しとなり

かんなハのりしとり　　秘 弟子の地し

あやしこきよゆうあれなりけん　何なと見つるしらぬ事

うとなるへしとりつるなり

これゆうらて上らりとて　河 才てとこへし二の町とあるに答匠

花 上の町といふ上藹の衆なるへし

秘 上藹のこゝろなるへし

箋 上衆のこゝろなるへきんし 殊性もてなしぬ事なれはとし

大将ミれのけさしとありて　秘 人への御けさうと折よてし皇花と

はけさしの葉心のありてあれる事なるへし　斎の初云の

庭よふりありし葉子の地なるへし

嵩 ものしきのけさしのあなと皇花かうらぬえたり　袖の色くらの

花 此斎葉てしおうらぬ枝ハ女二宮の色のふよわり皇帝の法女のしめらせ

秘 及くぬえてしハ二宮をとのへり

箋 うとの法皇なれハ及くぬ枝に袖の色くしよ物思ふかさしありと

下のくハ女二宮の法事

けくりあうそゆくきや　秘 あつ梅ゆしよるとし

箋 若菜摘し禁裏よりいまにいはひよりはしめてめてたき事なりとそかし
（今上御製也）よろづ代よりきくかはらん花のまへにはふたゝびあらたまるとそしられ
河 薫香舎 夜雨 延宝御製
新古 つくしてもつきぬは神の万代よりきく身つるや浪のよれ
元 まことの説縁なり
箋 夜は花をあらしなりぬねそこし
秘 御製し明末可し聞給へることまてりけり御あつきにとし
（久雲院御事なるべし）見るかれあまるところはしむさきの宮よりおそしぬ花の宮にしたかひ
河 慈光院にしても見るもめる夜の花いかゝ居よの事もしてたのむらん
元 拾遺集 延宝御時夜雨の夜花の花のえんをさけ給ひける夜と申ね
のこともけり此よまつりかけり 詠人 夜京雨峯
夜の名所のかくは宮のをとしれは花あやまつきまつりけり
秘 川の夜花のさかりは―― 久雲院の御なるべし
元 いかにもなり 此夜左大臣にや（久雲院し）
箋 久雲院の御をし宮しいさかは宮にお取るのり
（梅京大納言）よのつきのなるをきれかはとをおまつてもらうれかりけれる夜なりとしのべく

元 うれやらのちりよりし―― 梅京大納言のしらうたのかた井と
立のかけとらむる葉の梅にこそかたに似よりけり
箋 おのれ詞に丸えのちいおりしきれ花にほひたかし 梅京の
葉のことそしあるまじき事を心のある夜浪のむとは思ふし
思ひてもみりや もし名は思ひ事あるとはかくのや此おいめつ
らしくおりしこさふりしとなりしとし 若菜摘し
わせられしもひしをくも宮を給はりし此をのかえての 秘 紅梅なるべし
紅梅大臣とも此人同事ともしらぬ
元 声の事紅梅に似よりても此人ある 紅此上元
箋 紅梅をもとらい引勢の人のなりはしのしに此梅京紅梅なるべし
右の大夜の御七郎のかはりて
よろしく法のやよみ事に今とのせ二ふの夜の宴し 京呂にいは童を
笙の笛吹よりし人七郎ぞしわりしとき 箋 久雲院の息し 給ひし時
紅京呂よは男子の八人めにしもと紙よりしもよりとをたなし
箋 此家をゆかりなり
御そで 秘 還御し
あつさこそくらしなりてもそのことを給ふなり

上達部みこたちにさへかりけり　親王たちよりは勅禄あるへし
女房人々せの人々みな宮のれうとうけり　女房人楽一所の禄は
女二宮より禄を給ふるそまうけらるへし
秘 宮の御かたしは女二宮なり
宮ましてさせ給けり　箋 この秋より八おなし月夜裏にて暁還御し
その秋明ての夜女二宮に三条宮へ渡御なり
夜のえんの所ら所は秋の事し
らの女房さまらう　楼中一能作の女房大概は送りにあるへし
むかしれは車にて　箋 庇の車に女二宮の宮へ給ひし 花
ひさしなる糸毛(イトケ)　河 庇(ヒサシノ)の車　糸毛(イトケ)　金(コガネ)作(ヅクリ)　檳榔(ビラウ)毛(ケ)　網代(アジロ)
こかねつくり六り　秘 車れうりのかりの御わたり
花 おとなの今のかりのはらくなし　九條日　箋同
御迎のやうし車　出車(イダシグルマ)　しユウしやトモいふし
花 かりるうりれは迎なり箋
かん(カンツ)所の人て宰をとく　秘 かりるうりれはむかへなり
のやさしうらけてこまり給つる　女二宮と薫の里の事にて

くやしくのみおほさるなり
さりやうにあらくに　女二のさ宮御代にありしはされにへりらて宰
ありんへしきこゆ
色めしこの宮つましたしそ　箋 大君のこと
此女二宮ませて　うりまゐりまゐしなり
此世にてはたくさみのあり色こと　秘 薫の御かたなるて
御よめくしそ　箋 御よめく三明六通をゑて我身は前生
も大君との宿縁ありとわさしめされしとし
てこのいそ給ふれと　箋 宇治は寺し
かくせちみなり　雨は河原粟のされこりらしとおよそ
まいのくらまれけると　箋 是は八宮の旧跡なり
河 寺后の車し見むりくれのくらまなん後の寺は仏なり
花 先紀り給へ寺代の宮とく又宇治の宮へ渡りまゐなり
秘 寺に寺の寺になり　花わすしゐるくらまれりと御寺を
ありひとこしたくらかとのかしこき
そかくさ海にあるへき事に　八宮の所所のゆへなり

女の御身のうへしきこえ給ふにハあやしの　義 浮舟ハ始ニ未詳なるへし
あるまし北のかた男　常陸介のつかさ下人にとゝまるへし
夜ふけまゐりてかみもなく　其ハ弁尼の方へ立入て見てもらふ也
これ宿直さして　此車とも八丈のあくらへ不審し
ぢやくとらへ所せはしかりく　給ふし御しきと
花 ぢやぐ　かりの制し御人有し
しるさうもゆるし有ける　義 田舎ともまた馬のへちの称し
さふらはせんしどの　義 常陸前司
おほよそ常陸介なりけるにて後なり
おりやゝのし人あつまりたる出く　花 おいとハおもしろくもの
こときいふて　秘 供御しあるへしともひるなへし
義 かるけらし所をとよとあやしの給ふ也
心ありそふかん　秘 こなるこハ人をも有し
義 其ハとるふおもてなし人よりて世給ひしのそ此く随身にたへ
あめししゝ其をハあけまひとよハ左つせなりね
御しもれ人も　義 かるゝ代の人し也

るよもいさけなとし川（?）　ゐかけ遊るし所とさるへし
これ文んてらんそもらしあらかうそ　花 あそらく御車し
秘
義 此彩道ありとハなり
御この方れハ　秘 給その門ハし家の者にあるし
き給の其をひともにし
秘 とうさもねハゐさし給へるなる人
なゐしうしゐさしれもさらす　なきしくかくらしゐさしれ
将て給ひし給へるなり
あり［illegible］
こらふをおりりく　おりゐるへと推そて給ひし浮舟の年余り
あれてなくとあるひとる
ゆかるの人へまゐりえりし　義 おりゐる人をとんれてと弁尼にへ
とうなるへし
ゆかるの人へ也まゐりえりし　義 此車とて浮舟との姫して
くれそれてらんあめふ此人へ也其のおりとハきつきせてて其
く弁尼にれのひそしるし

ゆらうとハこのし給へてしてかくらハ　宮人をあまたしてしてかくし
ふかきこし蓋もちてあそし
うちれ人のあまもりありて　御息所ハ京ゑひらるへきなるへし
御ぜんれさ御ゆるわハこのありとおれ候くさやぬし
義 御前(ゴゼン)とハ御息所のつきてつかふる御前駈よ供して言つてしての
供の人々よ対して八葉車よりたへありける女房ハ短折やさと
秘 供よなる人々京たへ仕うるさ御し
人おらるひらるむといはせたてるわありて　そしも京ゑひらるへし
そやうといふて　おしなひらるへのいふて
わやたてゆくハなる　義 そしハ御息所の車のうちふかくいふて
もといの所とし　らもちておとあひらる人のいふたり
いりるの給ふハなるへきそそしん御座りく
わらハかく人のうち御とちられ人をうし恨みくわらひ給
くらいの所とやりてといふたり
給く御しふ京あかりしと　御息所ハ仁人のしるへきつて見ることれ給し
ほうやりしあらくなるかとハいとよくみのらす出つとあへし
秘 大ふなり 仰より
しれらちつめとって　かるれ心たり
車るとみつしおるし下ハそうりあると　秘 女車ハよる御の板より
お板し云ねとあくおろし車し　夜ふハ八日ごとかるへし 花
む そしよりて女の車ふおり寄る時ハお板と云ねよりて車 網代板
とうしとふらさんれたり
いとらうしけゆやくうて　河 良見(やとみ)よくしらるし ミ
義 追風れるらし御息所の車よりおりうけらふさ御し
ことらいよおてらしことおりしきかそかる
義 御息所の衣裳しちれハ紅れ
よろるへ互乃色ちらさ　河 若苗色し
花 うそあ仰の色らしすしさうる名めし夜のこゑの名ありわ
めくらいがかとよりしある　義 此女人の屏風ありれハこと上(やこ)より
うかるれえまつて
あらくさ御よむさて花し　うちこ母の御し

さむくらしけるを見てよみける　秘 人の心のひし
いつし川のほとりにも　河 泉川 本は河也し 日本紀に挑河とかけり
河下云大彦遣之 崇神天皇武埴安彦と此川を中にはさみて
挑戦さしたり　造 母フナリタシ 文集才二
彼いくさいさみあひたるをいつし川といひし哀なるやま
花 人てれりし詞し二つ川のことなり
箋 隠涙の祈し
あはれなるかりし　木津川ハ私のなりけりからわせりけり
わけゆらかおりへしいはこそあそなしけん
秘 あはれなるとらへし南紀の道なとハ危や　いはれとし 箋
あさりさへくらかりしもるあはれ　くる後よりさしへかりつる
二人のこあらたなり
さりハおもしをとく　箋 うれし涙落し
ひなくとさうし出てるかものとかふ　秘 ひさしれあ月の安なとく
いふへくもなし　やなり
おしけるかしともらる夜なかくしいふ色てしも

箋 涙母のこ夜夜にし人のうへくはなりけりとし
やすくらしいてなれはなく　箋の色をあくらうる祈し
うそ人あるかりつるしや　箋 隠涙 車よりおりつる人ありつ
かりるれ白ひとせとらあるるし
き人かをしふあるみめくるめの物のやや
二まめの小車よりおりるあるいとうしなし人ありつ
又下にいりし花もしきりおりやかしあつきふくを初の人なりけり
箋 天下テニカトヲモ二へしとしゝ　私河あらしすてて後れ出し
涙出すてあ月れ隠しとあかせし　箋物ていやうふハあく
さりしとらふあり
ちなるくふおかかせとも　弁石の歯なりも棚かくら哀哀
あそのからし　さしれ安元のなむかし　箋の後見隠し
物やに涙る
らきたるとおとせと　秘 物ちかけるまつり　箋 くさ物なりとまなりて涙安鏡あらし
ちなれ隠へしとえゆらし　河 退なり
おらしくなれま箋れをのころなくしとえゆらしくあもしおむをとし

これらりまさ御きハの　薫のたくれたるへとらんありめてる人みてら
しもんの御ことをかれは見ハいとあやしくむつらしきとし
おかたきありてハ　箋 かくれ事にてハ薫の人の御事なりとし
尼公ハ此夜の比りこゝめて　薫の比のるへしも比浮息やされとさらぬ
人しれぬたえかとおりて只いと比休息なりとやるし
此君御らうをりけるよ　御母宮薫の弱らへれひの事し
目くらしおふやと
御さうれありけり　弄尼の推量し
うらみ事御りして浪らうしのふきけり　河 此左訖薫の知りしおきへのあつし
弄尼は浮舟の事の気をし
かめるさうたく　秘 前よ此ありまへのかめなる事し
又弄は尼公のきたるこさねしいかゝ人のかめなる事よるみてなり
いとゝうるふく　秘 さらぬやうなし 花
此たおりしなんと　尼君 閉し泊流より此る立ゝ不事り御へとき
これそらへいとあやしく　箋 此を人へとは浮舟のことを浮さらぬ
しおとるひなるしありしへなりけり

気あさまむこふは人ちなめつらしく　河 安覧し
毒殺てなれくてしこさうもたなれとしりみし
いまそあさぬ浮る　箋 うさこ舟君のさ御し
そくこなるこりつめこれうりいとうくう続　秘 大君し 箋
秘 弄ともうるして薫のしてれあふるへむこなるし 花箋
こま御らるふつ寄く　箋 うき舟君ふ大君のたなくと思ふ
とおりかるれくなり
尼公はいへちらる　うきふまの知らまつひたなり
又れ河てにいとうく　似たるとや
花 中君みて此浮舟君の似たるなり　秘 中君みて似たり
初きこえもくハかわるに御つる所の似たるとし
これらくちあしうらんきくるの　見より色くさりたるれへし
うさゆりわらうて弱へし　見ハ見あなれハましてとし
おうもとあらくまつてさりかれと　いハ宮れ似てのちふるく人
浮ハさりし事し
またらふ在宮乃似るなとして　うき舟のさ御八宮の御まへたは

人かめくえしめつましたなり　老　つりされくし
世中のあしくしすまう物とし
秘　大こくよ似られハ世よおりしかかくらいひよりよられとし
かくらいはなくなるかさしれきりと伝へて　河　取金釵細合　老箋
各折其半授使者曰為我謝太上皇謹献是物尋旧好也　長恨歌伝
秘　此のうれ宮よくあらへし此今釵よ伝く給ふれとさらしなき
半し云宗れおりひ給ふしとくりとたるへ
箋　かくしてくり伊らし云宗れ仰ハ位花末なる人し　女ハなく人
なれと見すゐくらく似られハ愚ゐ不なとし葦のやし
人のうあつるかりと
箋　左右ハ葦の花ひとさして知りてのてれ
給ふて申てうちとけとおもしいくれさて入わる月とさなれ
人のうあり事とハあつま人よとられ葦藉の子うるおとらし
れそおとさ給ひく　箋　葦のおふれとし給ふしうさ母のれさらおもと
あさ海なとし　深わのかさ
まうてこれおひらしれ　給あれさ海と左右よ葦れらひ給ひて
まうしてまりおはさるし

うれきこてしてとハ　箋　葦の角し給母れ半紙弁れ給さし半し
あるあ月をとし伊りしのちハ　秘　弁の伺
こそハるてくこれさ給ひき　去母ハ浮くなくてもしとし
くらしけるれ給よそへ　箋　大宮れゆりなと弱のあるへ
なるゆとうるれ母のかほし
そのうち月もハれよやりふおくし給さしとし
給ひし付ふたまり　老箋
さくらし給宗をくひと　大宮れ給なれ似をとし　秘　女二人ふの約
うのくて宮ハさりる半なそ　深母の母さ居介の妻とし
かくおりしかれと事あふハ　箋　葦のおりし給ひて半なくて志るとし
めやもうる人ともみ世むかきてとるあつきこえしとて口よあるさ
秘　葦の口てあ給ひし　此半あよふり
さくりよの弓らんしてやりしらやらく　箋　らうれ伊くゐて弁子
のはりて深母くつりおまとして卸るらやらしとし
うつけよいけれかとてる給染りみと　秘　弁の祠
かわりれ宮もきりしあつまうやと去宗よ付よけくりよそ弱ある

河古　久されたる此人はなくかかかとりれかはみえてつきてまたなくは
日　鳥ある時のなく声てなく春けれの草は桃しける居て見るを
古　春れ世よ鳴く花鳥のし鳴くなくていくなくうしへ声りありへ也
毛詩云流離鳥少而好老而甚醜　此鳥は鳥本鳥れ一名とは
鳥とそいし或説云杜鵑の名なりとも云彼花咲比の鳥鳴を
又八雲抄云くか鳥ハ春日にふよあけりこと鳴まる鳴ところといふるさ
ゆきれ鳴きとひつりもあく声てなく春の比くといへり源氏物語
みを見こそらの鳥也と定まる此但定之家ハ不知之と云推之とい
ふらし此鳥也但未決

秘　薫の前しハ丸太一尺ほとまさうれはりて似るもと錦わりくとし
今案声もゆのしゆて色りしいふるなりゑきれ共とれとかく
是よりみちハ大ことかく似うり貌ハさうしとりて物とといひ
なれく声をとらくゆてまらぬといふなれはなれかにうつく
是をましかくみとことよくなつり
萬　鳥は欤しるるしとかうしき鳥欤いへり川なに久されハ此人
り鳴あるか鳥の——

是ハ大臣のかののやとこゑく錦のきこゆるとし
鳥く口をさみ乃居うふ宮乃御いつてこうりもあり
舟居の源氏れ大臣のなとし　春花奥入
かりあるし給ふるこれからかんさしなと　中宮乃事なり
私云清少納枕草子れ
同れにまつれとれあるのまうなからしとあるりし宗くひなとをうしくて
いふしるてきこし也

東方朔傳
薫君之竃由是衰至年三十而終後数歳竇太
主卒与薫君於霸陵是後公主貴人多踰礼制自薫始
武帝始舘陶公主号竇大主（如淳云竇太公之女也故云竇太主）當邑候陳午尚之
午孔主寡居年五十余近幸薫偃始偃与母賣珠為東偃年
十三随母出入主家左右言其姣好主召見曰吾為母養之
因留才中孜書計相馬御射頗傳記八十而冠之
萬云屡むつこ屡御てあつきしを物し紫宗なり